

Asia Center News

アジアセンターニュース

2001 No. 19

国際交流基金アジアセンター
The Japan Foundation Asia Center





表紙作品紹介

北尾 博史

《森の部品 垂直の森・キツネ》2000年

1967年京都府生まれ。スイス・ジュネーブ州立美術学校彫刻科卒業。1999年から「森の部品」と称した彫刻作品を制作している。

「この作品で、僕が表現したいと考えたことは、森の木々の間をすばやく走り抜けたキツネの姿を空から見下ろし、その後を追っていく鳥または風の視線でした。《森の部品》では、こうした僕の頭の中で描く森の情景を引用しつつ、彫刻作品として具現化することを試みています。一連の作品は、鉄や銅といった金属を素材としています。素材にこだわる理由は二つ。まず鉄と銅は古来利用されてきた天然の鉱物であり、自然と社会を往来するものだから。そして僕が慕う自然と、原風景との距離を保つことを願うからです。距離を保つことで、造作物が単なる自然の模造ではなく、独自の森の一部品として存在することを望んでいるのです。

幼いころ遠足で行った山、父が大切にしている庭、母が飾る生け花、下鴨神社の糺ノ森、スイスで見ていた黒い森……。風になびく木々の葉や、光が揺らめく木漏れ日は、刻一刻と変化を続け、いつまで眺めていても心地よいものです。この記憶が『頭の中の森』を形作り、その一部を持ち帰りたいという願いが、作品になったのです。今後どれくらいの部品を記憶の森から持ち帰ることができるのかわかりません。でも今度行くときは、両手いっぱい詰めて帰りたいと思っています（写真撮影：東 泰秀）

日韓交流特集

「2002年日韓国民交流年」に向けて

日韓交流の今

1

第1部 巻頭対談

「けんかができる交流こそ本物になる」

2

沢 知恵×林 夏生

第2部 2001年夏。私たちの日韓交流

高校生の日韓交流

7

(川崎富川高校生フォーラム ハナ イン プチョン2001)

風巻 浩

歴史を理解して、本音で語る

8

(いしだ人形劇フェスタ2001 日韓学生連続公演)

寺谷 純一郎

のぼせもの(情熱家)が支えた交流

9

(日韓親善伝統芸術文化交流

「韓国・オンヌリ国楽芸術団」安来公演)

野崎 ふしみ

「アトワールドディア展 ボンベイ」^{ラビリンズラボラトリー}「迷宮/実験室」より

異物としてのキツネ

11

林 道郎

字幕翻訳者は語る

『満月の日の死』から読み解くスリランカ社会

16

野口 忠司

アジア理解講座

「マレーシアを学ぶ～多民族国家の多面的理解のために」

ブルネイとシンガポールのマレー人

20

金子 芳樹

助成事業報告

アジアに広がる情報公開法制定の動き

22

情報公開は市民社会をひろくか

三木 由希子

クアラルンプール便り

日陰と風を呼びこんで

24

マレーシアの伝統的住宅に学ぶ

滝口 健

インフォメーション

25



上:釜山の映画館通りにある映画人の手型。上はキアロスタミ、下は北野武
下:映画館の看板。中央が『シコぶんじゃった。』右は『JSA』(上下とも撮影:石坂健治)

ワールドカップ日韓共同開催にともなう、二〇〇二年日韓国民交流年に向けて、現在、幅広い分野で文化交流が進行している。映画や音楽、旅行などの身近な娯楽や、さまざまな活動をきっかけに、互いの文化に対する関心は飛躍的な高まりを見せている。歴史認識問題をはじめとして、ときに揺れる日韓関係、だがその一方で、地道にたゆみなく日韓交流を進める努力を続ける人々の存在がある。

特集第一部では、韓国で初めて日本語で歌った歌手・沢知恵氏と、日韓文化交流を研究する林夏生氏に、今の日本と韓国について思うところを自由に語っていただいた。また第二部では、国際交流基金の日韓国民交流年特別事業、草の根交流事業助成事業の中から、「二〇〇一年夏、私たちの日韓交流」と題して、教科書問題の逆風のなかで実施された三つの交流事業について現場からの報告をお届けする。



日韓交流特集 「2002年日韓国民交流年」に向けて 日韓交流の今



「けんかができる交流こそ本物になる」

沢 知恵 × 林 夏生

交流の基本は、
個人が「楽しい」と思っていること

林 沢さんは最近北朝鮮へ行かれたそうですね。

沢 ビーサポートに乗って、初めて行ってきました。去年の金大中大統領と金正日総書記の会談の後、初めてビーサポートで南北同時に行けるようになったんです。北朝鮮は単独で行こうとすると手続きも費用もたいへんです。ライブをやればただで行けるって言われて(笑)。林さん、北朝鮮は？

林 まだ行ったことがないんです。どんどん変わっているそうですね。早く行ってみたいですね。学生を連れてよく韓国に行きますが韓国語ができない学生にも、安心して町を歩いておいでって言える。僕が初めて韓国へ行った九三年は、電力の節約のために地下鉄の電気も半分消していたし、サイレンが鳴ったら駅に入って戦車の通過を待つ、という状況でした。あれから七、八年しかたたないのに、こんなに変化しました。

沢 私は、二歳から六歳まで韓国にいたので七〇年代の韓国を肌で知っています。もう別の国ですよ。民主化運動の最盛期で、しかも祖母が民主化の母(金韓林)という……。金芝河(注：一九四一年生まれ。朴正熙政権下で、反政府運動を続けた詩人)の母親がうちに隠れに来たこともあったし、妹と一緒に納戸に隠れたり、刑務所にいる人のために祈りをするのが日課でした。また刑務所にいる伯母を訪ねて、私が歌ったり踊ったりして慰問したこともありました。

林 すこいな、時代の真ん中にいたんですね。沢 ついにの前までそうだった、というのをライブでもあえて話すようにしています。「マッシュムイス(北朝鮮)」(注：七〇年代の韓国民主化運動の象徴的な歌)を歌ってからこの曲は

シムレヒ「トルを挙げて火炎瓶を投げたとき」にみんなで歌ったものです」と言っていると、みんな「えー」と驚く。ただのきれいな歌の背後に、そういうストーリーがあることを軽く伝えるようにしている。

林 授業では、韓国は軍事情権、民主化、オリンピックを経て今に至る、と説明していますが、僕自身にそういうリアルな記憶はない。沢さんのように現場で見たかとは、とらえ方が全然違うと思います。

沢 子ども心にも、町が灰色だった記憶があります。時代の空気や皮膚感覚は覚えていません。だから後で勉強して事実を知ったとき、すんなり納得できる。しかしあのとき、獄につながれていた金大中が、大統領になっているんですね。

林 そうですね。当時の金大中の社会的な居場所を知っている人でないと、彼が大統領になったことがどれほど驚くべきことがわからない。しかも九八年に金大中が日本との関係を、今までのことはそれとして、これからは新しくスタートしよう」と言ったことなど。

沢 私たち二人とも若いのに、なんだかおじいさんとおばあさんの会話みたいですね。「あのころの韓国は……」みたいな(笑)。林 でも沢さんは、韓国の七〇、八〇年代を実際に体験しているんですから、うらやましい。

沢 ところで、南北クルーズの出發は八月十七日でしたから、教科書問題や靖国問題でまわりはどろどろしていました。私はいつものことだと思ってた(笑)。結局、問題の教科書はほとんど採用されなかった(注)で落ち着いた。

韓国はいつも、マスコミと政府の駆け引きでしょう。大衆文化開放のときもマスコミが「日本語で歌わせてやれ」と言っていると、政府がいや、ちょっと待て」とストップかけるし、政府がよし、開くぞ」と言っていると、マスコミが

「いや、まだ早いんじゃないかと止める。しかし韓国では、日本中があの教科書になるんじゃないか」という報道もあったから、日本では、使う教科書を選べる」と説明するとみんなびっくりしていました。北朝鮮でも教科書問題は話題になりました。

林 確かに、三月ごろの初期段階では、唯一の国定教科書をめぐる問題みたいに思っている人が多かったですね。お互いに、思い込みで相手の国を見ちゃうところがあります。

沢 日本は日本で、またマスコミの報道がすごく偏っているでしょう。

林 そう。教科書問題に怒った韓国人が、自分の指を切つて抗議した事件がありました。逆に韓国でのそういった過剰な反応を、日本にいる韓国人留学生が見てびっくりするんですね。

沢 日本人も、そういう韓国人ばかりだと思っちゃってでも思っていることをちゃんと伝えれば大丈夫なんです。日本と韓国ってずっとこうしたすれ違いの繰り返しでしょ。でもこれだ、これだと思ふ。交流は、ゆっくりゆっくり、慌ててやることはないんですよ。来年のワールドカップに向けて、「さあ、仲よくなろう」とみたいなイベントがいっぱい出てくるでしょうけれど、それは経済や政治の話。本当にきちんと交わらないと、その場限りで終わっちゃう。

林 あっしるのとおりです。沢さんには、歌がある。みんなが口ずさめる音楽は、大衆文化交流の中で大きな可能性がある。交流にかかわる個人が楽しいと思えることは、交流を実現する重要な条件だと思います。「あの国と仲よくするためにこの歌を歌いましょう」と言われたら、もう魅力があせてしまっているんですね。



沢 知恵(さわ ともえ)

歌手。1971年神奈川県生まれ。父は日本人、母は韓国人。母方の祖父は、韓国で文化勲章を受章した文学者の金素雲。幼少時から、韓国、米国、日本の3カ国で暮らす。東京芸術大学音楽学部卒業後、91年歌手デビュー。96年日本国籍の歌手として、初めてソウルでライブ公演を行なう。98年第40回日本レコード大賞アジア音楽賞受賞。



林 夏生(はやし なつお)

富山大学人文学部講師。1970年京都府生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了。96年から97年にかけて、ソウル大学校社会科学大学外交学科に留学。国際文化交流論、現代日韓関係専攻。主な論文として「韓国の文化交流政策と日韓関係」(平野健一郎編『国際文化交流の政治経済学』勤草書房、1999年)など。

過程で半分の故郷と向き合わなければならなかったから、韓国で歌い、その結果として交流があったわけです。

林 交流というイベントそれ自体が目的になっちゃうと、魅力を失ってしまう。特に文化交流はそういう側面が強いですね。

だれもが口ずさめる歌のパワー

林 ところで沢さんは、アメリカでは何語で歌うんですか。

沢 英語が多いですけど、日本語や韓国語でも歌います。英語じゃないと通用しないと思っていたんですが、アメリカで歌う回数が増えるにつれ、言葉以外の部分で十分伝わっていることに気づきました。

林 沢さんの「こころ」という曲には、いろいろな国の要素が入っていますよね。

沢 これは、もともと朝鮮の金東鳴(注一九〇〇〜六八年、詩人。政治に関する評論も多い)の詩を、私の祖父の金素雲(注一九〇七〜八一年、詩人。北原白秋に師事し、朝鮮の文化と伝統美を日本に紹介)が日本語に翻訳して、それから六十年くらいしてから私が作曲して歌い出したのです。河出書房の魔版になった『乳色の雲』という詩集にあった詩です。当時、朝鮮のエリートは日本の学校に行きました。金東鳴も青山学院大学の神学部を出ていてハイリンガル。祖父(金素雲)もハイリンガルで、私もハイならぬトライリンガルで、日本語と韓国語の響きを身体に持っている三人がつくった究極の、日韓の産物なんです。そういう歌だから、国籍を感じないのかも知れない。

林 伝統音楽だって、百年、千年という長いスパンで見れば、国籍なんかなくなってしまう。狭い意味で「日本だ」とか「韓国だ」というのではなく、大きなスケールで心を開くと、

自由な広がりが見えるんですね。

沢 歌とは運命的な出会いがある。自由で垣根がないところにたどり着くまでには、奥へ奥へとどんどん掘り下げなければならぬわけですが、その掘り下げ方をちよつと間違えると、広がりも何もなく閉じこもっちゃうだけだと思っんですよね。

林 例えば日本だったり韓国、アメリカ、あるいはイスラムだったり、世界の地域で大切にされてきた美しい言葉の響きや旋律がいろんな場所に出会って、さらにアーティストがクリエイティブを加えて作るから、新しくても懐かしくて、みんなが楽しめるものになっていくと思っんですよね。

沢 そのとおりですね。私の好きなジャズの生まれ方も、まさにそうですね。異文化同士がぶつかったとき、クリエイティブなものが生まれると思う。アーティスト同士が本気でぶつかり合わなければ、生まれないとはいまですね。

林 実は僕が韓国に関心を持ったきっかけとなったのは、韓国旅行で偶然買ったシン・スンフンとキム・ゴンホ(注一九〇年代の韓国を代表するポピュラー歌手)のCDでした。

沢 おお、新しい世代だ(笑)。

林 二人ともパレードがうまい歌手で、まねして歌っていました。博士課程で韓国に留学をしたときに、カラオケに行ったら、君は話すより歌うときのほうが韓国語がうまいと言われた(笑)。同じときにサムソリ(注:韓国の伝統的打楽器による民族音楽)を見たんです。全然違う音楽なんですけど、その二つが頭の中でずっと渦を巻いていました。それからサムソリ(注:物語に節をつけて歌う韓国の伝統芸能)の気迫にも驚いた。

沢 すこいですよね。

林 もともと音楽は好きでしたが、韓国の音楽はなんでこんなに生き生きしているのだから

うとおもしろかった。今でも授業で、まず何も言わずに最新のボブスからサムソリまで、韓国のCDをかけることにしています。すると俄然、学生が関心を持つようになる。音楽にアピールする力があると思っんですよね。沢 いいですね。音楽を好きにならたら、それがたまたまリアリティの自然な流れですね。

林 日韓文化交流は、韓国と日本のためだけじゃなく、僕らが世界全体とかわるときの大切な入り口のひところになり得る。そのことを学生や社会に伝えていくこととすると、音楽は僕にとって何より心強い素材になってくれるんです。

沢 前から思っていることなのですが、現代の日本と韓国ってオリジナルな文化をつくるのが下手だという共通部分があると思っんです。最近の消費音楽にオリジナルなものが見えないんですね。だからお互いを知ろうとするときに何かサセンがこっそり抜け落ちているような気がして、どこかで見たことがあるもの、どこかで聞いたことがあるものばかりになってしまっ。だから今度はお互いが刺激し合っって、ちゃんとオリジナルなものもつくっていきたいと思っんです。

林 沢さんがいうたいろいろで童謡や美空ひばりの音楽を歌っていますけど、これはその歌を紹介したいのか、それともオリジナルなものとして歌っているのでしょうか。

沢 古い歌もオリジナルになる可能性はあると思っます。オリジナルはゼロから生むものじゃなくて、究極まで突き詰めて、今でなければできない表現にして、時代も場所も超えていくものだという思いがあります。だから、必ずしも新しい音楽である必要はない。そこに宿っているエネルギーがフュージョンかどうかということですね。

林 八〇年代ぐらいまで、韓国が言う日本の悪口は、「日本は二番煎じ文化で、西洋から



の借り物をいじって売っているだけ」といつものでした。僕は、韓国が日本の大衆文化をどう見てきたかを調べに行きただけに、すくなくブルになった。なにもそこまで言わなくても笑った。でもその口グキも成り立ち得るし、そう思われても仕方がないなとも考えた。逆に多くの国が「日本文化、大歓迎」といつ風潮の中にあるとき「さっさと待て」と言うてくれる韓国は、日本にとつていいパートナーだと思っんです。突っ込んだやりとりができるからこそ、お互い気がつくところもいっぱいある。

沢 同感ですね。韓国のアーティストと歌った後に、彼らは率直に言いますよね。「歌はいいけど、僕はこう思う」とか。私も彼らに率直な意見を言いますが、そういうやりとりが増えるといいですよ。ちゃんと対話をするのが大事ですよ。男と女も、嫁姑も、みんなちゃんとぶつかって、言いたいことを言わなくちゃ。韓国人から見たら、日本人って何考えているか、きくとわからないですよ。

日本対韓国ではなく、
日韓混合チームのすすめ

林 その「で、あなたはどう考えるの」って言われます。主張しているつもりなんですけど、もつと言ったほうがいいみたいですね。今

回のような問題が起きて、ちょっとでも険悪なムードになるともうみんなフラフラして、もう、やめましょ」となる。しかし韓国で生活したかたは「存じのとおり、口角泡を飛ばして自分のことを主張するのが韓国人の人なんだから、それを見て焦って騒ぐ必要はないんです。学生会議なんか、みんな半泣きで、けんかしながらやっています。日本チーム対韓国チームでやるんですが、韓国チームに言い負かされた」といつ泣いている日本人の学生もいた。

「どういやりとりを見ていて、僕は、日本対韓国ではなく、日韓混合チームにするとおもしろいと思っんです。例えば「ポルトガル」で、混合チーム対混合チームにして、いかにうまくコミュニケーションがとれたかを競う。よそのチームに負けまいとして、よく協力できるかもしれない。

沢 それもおもしろいですね。日本人は、怒られるのが怖い、嫌われるのが怖い、っていうのがあつた。「怒っているんじゃないのよ。あなたを嫌いじゃないのよ。いいものをつくりたいから言っているのよ」といつ思いますね。議論や主張の仕方とか、ノリによさとか、エネルギーの込め方とかを韓国人から学んで、韓国人は日本人と一緒に仕事をすること、緻密な計画の立て方とか、冷静な考えを学ぶ。最後は不思議なことに、日本人とか韓国人といつのが関係なくなつて個人になる。

林 けんかしてそれを乗り越えることではか手に入らない交流もあるし、過程が大切ですよ。けんかができるチャンスそのものを逃してしまつたとしたら、残念なことです。今年の夏の教科書問題や靖国問題をどう振り返るべきかといつのはまだ時間のかかる問題です。しかし政府要人の交流やビジネス交流への影響は別として、地方都市の青少年のサッカーチームなどは、韓国に行つて友達つ

くつて、おいしいものを食べながらサッカーすることを楽しみにしていたと思っんです。それが急になくなつた。彼らには残念だつたことと思います。

沢 ただ、あのとき一言に、もう中止だ、中止だなんて言つていたらには、一カ月後くらいには、やっぱりやりましょ」といつことになる。それが韓国ですよ。

林 学生交流の中には、こんなタイミングだから「そ今しかできない交流をやるんだ」と血気盛んなものも多かつたと思っ。この夏の一連の出来事を、ハラハラしながら見ていたが、チャンスをお互い放棄してしまつたかといつと、決してそうではない。観光客が大量に往来するなかで、「いろいろと難しい問題があるときにも、僕らはお互い素直に楽しむことができるんだ」と実感してきた若者も多かつたと思っ。僕も含めてちょっと上ぐらの世代には、韓国に関心を持っているいろいろ勉強して、勉強したがゆえにだんだん気が重くなつて、韓国に行きたくなくなつたといつ人の話をよく聞いたものでしたが、どこか対照的ですね。

沢 でも若い世代も、日本と韓国の歴史を最低限知らなきゃいけないと思っ。トースターで会つた若者たちは、従軍慰安婦といつ言葉は知つていても、その本当の意味は知らない。日本が何をしたのか、事実として知つたうえで楽しく騒ぐ分にはいいけど。

林 たしかに今年の夏をきうかけとして、一度立ち止まつて考えてみる必要は、やはりあつたと思っ。それで「そ次のレベルに上がるんじゃないかな。」日本大衆文化開放（注：九八年に韓国政府が決定した、段階的に日本の大衆文化を開放する方針。第一次は三大映画祭受賞作品、ビデオ、出版部門の解禁。第二次はアニメを除く約七〇の国際映画祭受賞作品と特定の場所での日本語の

歌謡曲解禁、第三次は日本歌謡公演、劇場用アニメの一部とすべての一般映画上映の四次が無期延期になったことについてどう思いますか」と聞かれることが多いんですが、とにかく開放を急げばいいというものではないと僕は考えています。状況に合わせて納得しながら進めるべきでしょう。

沢 フランスでは、流さない英語の曲はほぼいあるし、そのことに対してアメリカが文句を言ったことはないでしょう。それぞれの国で事情があるからできる範囲で精いっぱいやることをやる。そういえば今回、北朝鮮では、日本語で歌ったの。英語も韓国語もだめって。林 え、そうだったんですか？

沢 韓国語で歌う用意はしてたんです。でも「日本から来た人として、日本語で歌いなさい」と。北朝鮮は、音楽の力を知っているんですよ。だから聴衆に韓国語でラップングを語りかけることを警戒したんだと思う。CDの持ち込みもかたく禁止された。それで北朝鮮では、みんな、寅さんを知っている。苦肉の策で「男はつらいよ」を歌った。その国で、そのとき何がオーケーで、何がオーケーじゃないかは、私たちの理解の範疇じゃないですよ。

林 そう、確かに。留学しているとき、日本の大衆文化なんて低俗で下チチで、見るだけで毒です」と言われたことがあって、そのときには自分まで否定されたような気がしてショックを受けた。ただその後研究を続けるなかで、例えば韓国は、競争力の強い日本の映画や歌謡曲の流入により韓国の文化産業が打撃を受けることを強く恐れていた、ということもわかった。軍事政権下の韓国で、文化産業の国際競争力が一時的に低下していたのは事実でしょう。また、六〇〜七〇年代は北朝鮮の映画による文化宣伝も強化されていたところでもありました。当時の韓国は、日本の

大衆文化だけじゃなく、政府がコントロールできない価値観や影響力が入ってくることに、きわめて敏感だったんですね。このほかに、もさまざまなきっかけが影響するなか、日韓大衆文化交流のあり方というのは実に複雑な決まり方をしてきたのだと思います。

沢 逆に韓国がオーケーと言ったのに、日本がそれほど入っていかないでしょ。あれは、著作権料が徴収できないからなんです。行ってもお金にならないことがわかったら、だれも入っていかないですよ。

林 著作権については、万国著作権協定への加盟以後、国際水準のルールを守ろうと努力をしているところですよ。

沢 私は、韓国に日本の歌がワット入っても、トップチャートで日本語の歌が一位になることはないと思う。だって日本にどんなにいい音楽が入ってきたって、一位になるのは日本の歌でしょ。日本人が日本語でその時代の背景とともに歌う歌がいちばん心に響く。だからお互いにもう少し肩の力を抜いて考えたいと思います。

林 九八年末に、『HANA BI』（北野武監督、九七年）や『影武者』（黒澤明監督、八〇年）が韓国で公開されたが、案外地味だった。『Love Letter』（岩井俊二監督、九五年）

だって、タレントにタレントを重ねて画面が嵐のようになった。テオを見たときにはみんなワクワクしたけど、大きなスクリーンで見ちゃうと、あれっ、たいしたことないやっつて（笑）。そういうのを一つ一つ越えて、冷静になってきているんですよ。八四年に日本の衛星放送が試験放送を始めたとき、韓国では「日本の放送が上から降ってくるなんて言語道断だ」という批判が繰り返された一方で、実際にそれを見た人からは、ドキュメンタリーなんかいい出来ですね。むしろ学ぶところが多々ある」といった意見が聞かれた

りもしたんですよ。

それと八〇年代末に韓国からの海外渡航が自由化されたことも大きな転機だったんじゃないかな。いざ実際に日本に行ってみたら確かに露天風呂はあるけどみんなが混浴なわけじゃないし、町を歩いてみたらそれなりにおもしろかったり。冷戦構造が崩壊して北朝鮮がこうだから日韓は近づかなきゃいけない」とか、「韓国の経済が発展してきているいるものを入れてもいいから、日本のものも許してやろう」となると、この見方もあります。結局は、韓国の大衆が、おもしろいと判断したからだと思う。ここ数年の、いわば、日韓交流ハブを経た今こそ、本当に大切なものは何だろう、と今一度振り返っておく必要がある。日韓間の問題だけに気を取られるつい忘れがちですが、世界全体を視野に入れると、実は日韓関係というのは対立より協力のほうがずっと勝っている関係じゃないでしょうか。

沢 そうなんです。大体ね、隣というのは嫌なもんなんです。うちの近所もそうなんですけど、隣の家って何が気に食わないわけですよ（笑）。アイルランドとイギリスもそうですし、ドイツとフランスもそう。

林 僕はある国がある国のことを、それは人に置き換えてもいいんですけど、好きと思う気持ちと嫌だと思う気持ちって、プラスマイナスで打ち消し合うようなものじゃなく、嫌いなところが好きなのと同じようにあって当然だと思っんです。だから交流して、好きにならなきゃいけません。嫌いなところはいいません。さあ、どうぞ」と言われても、そんなの最初から無理な話です。まずは相手のことをどどんん知って、好きなところも嫌いなところも増やしていく、そういう交流ができればいいですね。



国際交流の原点は、お隣さんと仲よく

林 同じことは、最近だと例えばイスラム社会とかかわりにについても言える。僕の住んでいる富山には、中古車やタイヤのディーリングをしているパキスタン人のかたがたくさんおられるんですよ。

沢 コーランが破られる事件があったのは、富山でした？

林 ええ、富山です。富山県の外国人登録の統計でいちばん多いのはラジル国籍で、次に韓国・朝鮮籍、中国籍と続き、パキスタン籍は第八位なんです。実際、富山はソウルへの直行便が便利なことなどもあって、それで日韓関係に関心を持った人がやがてさまざまに国籍を持つ人々とかかわりへと関心を広げていく、そんなケースが多いのは興味深いことです。同じ日本人としても、海と山が迫っている町ですから、海の人と山の人の考え方にもおもしろい違いがあるし、さらには西部と東部、若い世代とお年寄り世代、男性と女性、セクシャルマイノリティの問題も含めてみれば、考え方の違いを乗り越えてわかり合おうべき対象というのは、なにも国境の向こうにだけいるわけじゃないよなあ、ということを感じますね。

沢 国際交流って、外国に出かけなきゃできないことではなくなってきましたよね。お隣

さんと仲よくできるかどつかというところからですよ。

林 国境を挟んで言葉が違って、初めて会うから、何か達成感があったり楽しかったりする。でもそれを今度は同じ地区に住んでいる外国人、日本人同士、最後は同じ家に住んでいる人が仲よくなるための発想にまで、うまく応用できればいいですね。本当の意味での交流は、きつと人々の生活を豊かにしてくれるものだと思います。

だから、日韓交流事業の意義や成果もまた日韓の枠にとどめてはもったいない。でも、そこからポジティブな意味を引き出せるかどうかは、参加者にゆだねられていると思うんです。国や地方自治体レベルの限られた単年度予算でできる交流には限りがあるけど、参加する人々の気持ち次第で、思いがけない効果が生まれてくる可能性は十分にあります。

沢 私は人と出会うために歌っています。歌うことで解放されて、自分が弱くならなければ人と出会えない、ということがわかったんです。そんなことを日本をベースにしなからもうともうと追求していきたく。東京発、日本発のものが世界のあちこちでどう響くのかを探っていきたく。今回、北朝鮮で歌えたことで、「なあんだ。じゃあ私、どこに行ったら歌えるじゃん」と励まされた気がします。

林 実は、沢さんとは印象的な出会いが二回あるんです。一回目は、とある大学のセミナーでお会いしたとき。あのとき僕はまだ院生で、日韓文化交流の発表をした。しかしうまくまとめることができず、頭が真っ白になって、大変でした。その後、沢さんが登場して自己紹介の代わりに、会場のピアノで歌を歌ったんですよ。そのとき「なんでこれだー」と思ったんです。だってあまりに格好よかった！

沢 たしか私はだれでしょう（作詞／曲：沢知恵）を歌ったんですよ。川崎で生まれ

て、あちこちで育ち、朝は納豆、夜はキムチ、私はだれでしょうで、サビがアイ・ドン・ケア、アイ・ドン・ケア、私はだれでしょう。最後は、わたしはわたし、オー、イナ、って終わるんですけど。

林 それですよ、それ。自分はまだまだ、韓国に行つては自信をなくし、日本に帰つてきても自信をなくして、自分って何なんだろっと思つていたときに、「わたしはわたし、シャーマン、オー、イナ、ってやれる沢さんってなんて格好いいんだろっと思つたんです。

その後しばらくしたある日、ラジオを聞いていたら、「私のこころは湖水です……」と始まる歌が聞こえてきた。いい曲だなと思つてポーツと聞いていたら、「ん？」と記憶がよみがえったんです。その原詩を、僕は韓国の語学学校の韓国語四級という教科書で習つていたんです。当時の僕といえはまた韓国語もつまくしゃべれず、「日本文化なんてくそ食らえみたいな韓国の雑誌記事ばかり読んで、ずいぶんへこんでたんですけど、その美しい韓国語の詩を読んだとき、僕はほんとうに救われた気がしました。静かで、深い広がりがある、空気がふと目に浮かんでくる。沢さんは、詩に自然に音を乗せたらあんなに」とおっしゃっていましたが、日本語で聞いていたのに、あのとき韓国語で読んだ原詩の風景が、そっくり浮かんできたんです。

沢 わかります、それはある。
林 そして曲紹介で、それが沢知恵さんの「こころ」という曲だと知つて、すぐにCDを買いに走りまわりました。

沢 今日差し上げますよ。

林 いやいや、もうちゃんとゲットしております（笑）。今回お話をうかがつ準備をする間も、ずっと繰り返し聞いていたものですか、ら、ついそのことを思い出して、夢中でお話ししてしまいました（笑）。◎

第2部 2001年夏。私たちの日韓交流



川崎富川高校生フォーラム ハナ イン プジョン2001 高校生の日韓交流

実施期間:2001年7月22日～26日
事業内容:日韓の高校生の相互交流。

風巻 浩(神奈川県立川崎南高校教諭)



教科書について話し合う日韓の高校生

韓国の富川市は、ソウルと仁川のほぼ中間に位置する工業都市。東京と横浜にはさまれた川崎市とよく似た環境だ。川崎市と富川市が友好都市となったのは一九九六年。以来、両市在住の画家が合同で展覧会を企画したり、サッカーチームの交流試合などを行

なってきた。

互いの市の職員交流で、富川市役所在職中の川崎市の職員が、富川高校の「日本研究班」が日本の高校生との交流を希望していることを知り、日韓の生徒の交流が始まった。そして昨年夏、川崎南高校の風巻先生と、ポランテアワーカース部の生徒二名が富川市を訪れた。「富川高校の生徒の家にホームステイをしました。日本語、韓国語、さらにカタコト英語とボディーランゲージを駆使してコミュニケーションしていました」。初めての韓国で、習慣の違いなどに戸惑うことも多かったという。

その後、昨年十二月に、今度は富川高校の「日本研究班」の十三名の高校生が川崎市を訪れた。「人数が多かったので、川崎南高校の生徒や、地域の多文化文化祭、アリアン祭の実行委員会の高校生たち呼びかけて、ホームステイ先を探しました。日本と韓国の高校生は、いっしょに深夜までゲームをしたり、秋葉原へ行ったり、すぐ打ち解けていました」。そしてこのとき、なぜ日韓は互いにこだわるのかその原因を考えようということになり、「日韓の歴史をきちんと理解すること」で合意。次に韓国で会うときまでに、歴史を自分たちで調べることにしたのだ。

川崎の高校生が、訪韓の準備に追われていた今年二月、教科書問題が起きた。「メールで韓国とも連絡を取っていたのですが、教科書問題の余波で、貸してもらえないパスが使えなくなりそうだとか、予定していた市長の表敬訪問がキャンセルになりそうだ」という連絡が入った。しかし柔軟な対応をしてくれた韓国の人々もたくさんいたのです。とくに市民団体の強力なサポートは心強かったですね。結局、パスも表敬訪問も大丈夫になりました。そして教科書問題が頂点に達した夏、川崎の高校生五名が、再び富川を訪れるこ

とになった。日本の高校生は、図書館やインターネットから手分けして資料を集め、韓国の高校生たちも、政府発表だけでなく、実際に自分たちで教科書を読み、討論をすることになった。

討論会では、朝鮮開国、日清戦争、日露戦争、アジア太平洋戦争の従軍慰安婦問題などに関し、川崎の高校生が意見を述べ、それに対して討論する形式をとった。ところが、川崎の生徒たちが用意していた意見に対して、富川高校の生徒たちからはほとんど異論がなかったのだ。「両者ともに、きちんと理解さえすれば、視点は違いないんだ」ということが確認できたのです。教科書問題も、日本ではいくつかある教科書から選べるということを説明し、さらに実際に問題とされた教科書はほとんど採用されなかったことも報告しました。「日本の高校生は、富川市の高校生とともに、日本大使館前の抗議集会を見て、植民地時代の展示を見るために西大門刑務所の歴史館を訪れた。元慰安婦の暮らす、ナムの家」では泣き出す日本の女子高生もいた。五日間の滞在中、富川高校だけでなく富川女子高校、富川北高校、素明女子高校などの約百人の高校生と会った。

「お互いが日韓の歴史について共通認識を持つことで、理解が深まったようです」と風巻先生は振り返る。川崎市と富川市の高校生は、自分たちが調べた資料を載せるための共通のホームページと、川崎と富川の地域史「共通副読本」を作ることになった。生徒たちが立ち上げたホームページ「ハナ(ひと)」が、大きく育つことを願わずにはいられない。

「ハナ」は、<http://www.alikorea.co.jp/>の「コミュニケーション」のトナリ(同好会)内

いいだ人形劇フェスタ2001 日韓学生連続公演 歴史を理解して、本音で語る

寺谷 純一郎 (長野県飯田市教育委員会)

実施期間:2001年7月31日~8月5日
事業内容:児童文化や幼児教育を学ぶ日韓の学生人形劇サークルが交流。また飯田市内で日本の子どもたちに人形劇を披露した。



わいわいパレードに参加した明知大学の保育科の学生たち

「人形劇のまち」飯田市の人形劇フェスタ

かつて人形浄瑠璃が盛んだつた長野県飯田市。ここで初めて、「人形劇カーニバル飯田」が開催されたのは一九七九年。全国で十万人いるといわれた人形劇の関係者だが、ボランティア団体や一人だけの劇団もあり、当時情報交換をする機会や場所はなかった。人形劇の公演と情報の場を提供した、「人形劇カーニバル飯田」は、その後毎年続けられるようになる。現在は、「いいだ人形劇フェスタ」と名前を変え、全国から人形劇関係者が集い、飯田市は、「人形劇のまち」として知られるようになった。そして二十三回目を迎えた今年、国内外から二百五十以上の団体、約千六百人が参加した。今回韓国から初めて参加した明知大学の保育科の学生たちが参加したのは、「大学連続公演」。「いいだ人形劇フェスタ」のなかのひとつの企画で、若者のレベルアップを目的にした大学のサークルによる公演だ。「毎年参加していた韓国のプロが、教えるの学生を連れてきたい」ということで、申し込みを

受けていました。韓国では政治的な規制が長く続いたため舞台芸術はかなり遅れていたんですね。九三年に私が初めて韓国に行ったとき、日本の人形劇より二十〜三十年は遅れていた。そして不思議なことに、中国と日本には、それぞれ『布袋戯』『文楽』という独自の伝統的な人形劇が存在していたが、韓国には伝統的な人形劇がなかった。人形劇の系譜である仮面劇は盛んだつたのですが。」

歴史を知り、文化の違いを理解する

人形劇フェスタを通してさまざまな国の人々に対応してきた寺谷さんのモットーは、「お互いの文化の違いを理解してつき合うこと」。郷に入れば郷に従えは、国内の場合だけです。国が違い、宗教が進えば倫理観はまた違うのだということ認識しなくては、以前にインドの菜食主義の人が来たんですが、ホテルの食事は何が入っているかわからないから食べられない。結局公民館に泊まって、スーパーで買い物をして自炊をした。日本人には理解しにくい風習やしきたりもたくさんありますから、そういう相手の事情をわきまえて対応することです。今回も、学生は公民館で宿泊し、その隣の銭湯を利用する予定だつた。「銭湯そのものはいいのですが、問題は番台。着替えているところを他の人に見られるというのは、ダメかもしれないと思ったので、ダメな場合の手だてをあらかじめ考えておきました。私の車で近くの温泉までバス送付すれば、学生十一名だから三往復、行って帰って六往復だ、と覚悟はしていました。幸いにも大学生たちは銭湯のシステムを納得してくれたので、バス送付はしなくてすんだ。」「さらに日韓の場合、韓国が日本の植民地だったという歴史を理解していなければいけない。今回教科書問題と靖国問題が起きたと

き、学生を引率する韓国の関係者に手紙を書いたんですよ。」「この問題の一端は、あなたの国にもある。」「歴史をさかのぼって、そのときどきの政府が解決したはずの問題ではないかってね。やったことはやったこととしてちゃんと認めなくてはいけないが、その後の歴史の経緯もきちんと踏まえるべきだ、ということにを順を追って手紙に書きました。そして韓国から、寺谷なら安心してつき合える」と言ってきた。手紙のやりとりだけで納得してくれました。その手紙は韓国語に翻訳して学生たちにも回したそうです。そして一人も取り止めることなく、当初の予定通り十一名の学生は、「いいだ人形劇フェスタ」に参加した。

「今の韓国の若者は、少し前の世代のように、日韓関係にわたかまりをもっていない。初めての海外旅行を心底楽しんでいました。八日間の滞在で、最初の三日は公演の準備で大忙しでしたが、あとはほかの人形劇を見学したり、パレードに参加したりしていました。明知大学の劇団「人形と人たちが選んだのは、アンデルセンの『醜いアヒルの子』。声を入れず、音楽と鳥や動物の鳴き声など効果音だけで行なうこと」で日本の子どもたちにもわかる人形劇にした。「韓国の人形劇には、教訓めいたものが多い。でも本当は、ただ楽しむだけのものであつていい、というのが私の考えです。人形劇を見た子どもに残るのは、おもしろかつた、っていう印象だけなので、彼女たちは非常に真面目な学生たちでしたから、さまざまなお話の劇を見て驚いていました。ただばかばかしいだけの人形劇のおもしろさにも、気づいてくれたのではないだろうか。」「明知大学は、短大なので、来年も同じメンバーが来ることはないと思います。しかしぜひ来年も飯田へ来て、たくさんの人形劇を見たり、ほかの国々の人々と交流してほしい。」「寺谷さんの本音の交流は、まだまだ続く。」

日韓親善伝統芸術交流事業 「韓国・オンヌリ国楽芸術団」安来公演 のほせもの情熱家が支えた交流

野崎 ふしみ(ふしみ和紙アート研究所主宰)

実施期間:2001年7月13日～16日
事業内容:韓国の子どもたちが楽器演奏をする「韓国・オンヌリ国楽芸術団」を島根県安来市に招へい。ホームステイをしながら市内の施設などで親善を兼ねた公演を行ない、交流を深めた。



和紙工芸作家と
オンヌリの子どもたちの出会い

「一九九九年、韓国の大邱市で初めてオンヌリの子どもたちの演奏を聴いたとき、感動して涙が止まらなくなりました。そして思わず『ぜひ日本でも演奏してほしい』といった私のひところ、すべてが始まったのです。オンヌリ国楽芸術団は、韓国の児童養護施設の子どもたちが編成する楽団である。施設の長であり今回の団長でもある具尚本氏が、子どもたちの将来のために国楽芸を身につけさせたいという思いから、杖鼓や伽耶琴、大琴などを習わせたのである。

一方島根で生まれ育った野崎さんは、和紙工芸作家として「ちぎり絵」教室を主宰し、和紙の素晴らしさや楽しさを教えてきた。地元の子空港が国際線として開港するに際して何かで韓国と交流をしようというときに、野崎さんのちぎり絵が浮上。そして九〇年に野崎さんが韓国の釜山で、幼稚園の先生にちぎり絵を紹介することになった。「韓国の紙は、硬くてうまくちぎれないため、日本の和紙を持っていきました。韓国の人たちは指先ひとつで作れるちぎり絵にとっても驚いていましたね。それで当初一回限りで終わる

予定だった訪韓が、たびたび出かけることになったのです。「ちぎり絵」交流でさまざまな都市を訪れ、九九年に大邱市で百人講習会を行なったときに、オンヌリの子どもたちの演奏を初めて聴いたのである。

野崎さんの「日本で演奏させたい」のひところ、子どもたちを奮起させた。「それ以来子どもたちが夢中で練習するようになったそののです。子どもたちがその気になってしまったことを聞いた野崎さんも、後へは引けない。こうして日本側の受け入れ準備を始めることになった。

異文化を受け入れること

「受け入れるといっても、私個人でやるしかなかったのです。というのも、安来市と安来地区日韓親善協会は、韓国の密陽市とすでに姉妹都市を結んでいたために、私は、場所を限定しない積極的な交流をしようと思ったのです。それ以前にホームステイで韓国人を自宅に受け入れた経験もあり、隣国といえども、習慣の違いは痛感していた。「最初にホームステイで受け入れた韓国の女性るときは悲惨でした。家に到着するや、泣きながら『帰る』と言っんです。言葉が通じなくて理由がわからないので、韓国語のわかる人に電話をして通訳してもらつと、スリッパが履きやすい向きに並べてあったと言っんです。日本では次に使う人の便利さを考えて向きを変えておきますが、韓国では『帰れ』という意味があるそののです」。

韓国の人たちとの交流やホームステイから実に多くのことを学んだという。なんで女性が立て膝をして座るのだらうという疑問も、自分がチマチヨリを着せてもらったときに理解した。「チマチヨリを着て正座すると裾がしぼんでしまいますが、立て膝をすると

裾は優雅に広がりました。立ち上がるときは楽で、見ていると実に優雅で美しいのです」。ほかにも、白菜を漬けるとき、生のままだとパリパリしていて洗にくいのが、最初に塩漬にしてしんなりさせてから洗うと洗いがやすいことなども体感した。まさに身近なところから、文化の違いに気づいたのだという。

今回受け入れたオンヌリ国楽芸術団の総勢は、子どもたち九名と団長や通訳を含めて十六名。野崎さんは、知り合いに頼んで宿泊先を確保し、貸し布団の手配などを行なった。「移動のときの楽器の扱いにも細心の注意を払わなくてはいけないし、せうかく来た子どもたちに、観光もさせてあげたかったので、解決すべき問題は山のようにありました」。

そして来日直前に教科書問題が起きた。友好的なムードが一転して険悪な雰囲気になり、手を引いてしまふ協力者もいて、さらに野崎さんの苦境は続いた。「スポーツ関係の日韓交流は、次々とキャンセルされています。たし、ホームステイをするために韓国に出かけた人々が、韓国の空港からそのまま日本にUターンした、という例もありましたから、一時はどうなるかと思いましたが、でも責任は全部私が引き受けるからといって、みんなを説得して回りました。韓国側も大変だった。元校長先生という経歴を隠して来日した人もいた。

オンヌリの子どもたちと
安来の人々の交流

オンヌリ一行は、七月十三日から四日間安来市に滞在した。日本での演奏は、島根県の児童養護施設安来学園と、老人保健施設員寿園、そして大山ロイヤルホテルでの三カ所だ。安来学園の子どもたちは、安来節(どじ



国際交流基金日韓文化交流連絡室より

2002年の「日韓国民交流年」に向けて、日韓両国の地域・草の根レベルの交流はますます盛んになっています。国際交流基金では、日韓交流を支援するため、「日韓国民交流年草の根交流事業助成」プログラムを設け、助成を行なっています。詳細は、「2002年日韓国民交流年」のホームページ (<http://www.jpff.go.jp/jkxx>) をご覧ください。申請書フォームもダウンロードできます。2002年度も続けて実施します。

申請書提出先・照会先
 国際交流基金日韓文化交流連絡室(担当:大森)
 〒107-0052 東京都港区赤坂2-17-22 赤坂ソ
 インタワービル1F
 国際交流基金アジアセンター日韓文化交流連絡室
 電話:03-5562-3638 ファックス:03-5562-3898
 電子メール:jkxx@jpf.go.jp



大山ロイヤルホテルでのオンヌリ国楽芸術団の演奏

ようすくい)を披露。会場では安来学園の三十七名の生徒の中にオンヌリの子どもたちを交えて座らせた。「初めは、安来学園の子どもたちはあまり乗り気ではなかったのですが、オンヌリの子どもたちの真剣な演奏に、熱い空気が伝わってきて、思わず涙を流す子どもも。そのうち、安来学園とオンヌリの子ども同士が身振り手振りで会話を始めたのです。最後には、安来学園の子どもたちが通訳の人に「文通がしたいが、どうしたらいいだろう」と相談をもちかけた。これが日本の子ども同士との交流だったらどうだったのか……、同じように熱い交流を願って止みません。なぜならさめていた安来学園の子どもたちが、来たときは遠く、目を輝かせ、八キハキとした足取りで帰っていったのですから」。

昌寿園では、六十名ほどのお年寄りを前に熱演。途中から職員全員が顔を出して、演奏に聴き惚れた。感動に涙を流すお年寄りの姿が忘れられない、という野崎さん。そして大山ロイヤルホテルの演奏には、二百名が出席。最後に全員が輪になってアリランを歌い、踊り出した。教科書問題や首相の靖国神社参拝で揺れ動く国情の中、大きな感動を残してオンヌリ国楽芸術団の安来公演は幕を下ろした。

「出雲和紙、因州和紙……、指先で和紙に触れるとそれぞれの資質の違いがわかります。同様にちぎり絵教室で、さまざまな立場の人々と接することで、政治、宗教、差別など、考え方の違いに気づきました。今は異文化を認め、もっともっと韓国のことを勉強して、民族の誇りについても考えていきたいですね。韓国との交流から、私は生きる力をもらいましたし、韓国へ行くたびに心が洗われるのです」。

安来市で、野崎さんはのほせもの情熱家(と呼ばれる)。「韓国に骨を埋めてもいい」と言い切るほど日韓交流に情熱を注ぐ野崎さんの活動が、どのように広がりを見せるのか、注目していきたい。



『偉大なるラクシュミ』(2001年)



『偉大なるラクシュミ』のシャッターを開けたところ

ラピリンス ラボラトリー
**「アール・ドゥ・ディア展 ボンベイ:迷宮/実験室」より
 異物としてのキッチュ**

林 道郎 (武蔵大学人文学部助教授)

国際交流基金アジアセンターでは、インドで活躍中の作家、アール・ドゥ・ディアの展覧会を、今年6月末から1カ月あまりにわたって開催した。街中の公共空間で見かける「レディメイド」を作品に取り込み、インドで最も変貌の激しい大都市、ボンベイ(ムンバイ)の街並みから着想を得て制作したインスタレーションの数々と絵画群。インド映画に顕著なポピュラー・カルチャーに内包される集団的幻想や、伝統的な民族習慣をポストモダン的に解釈した作品が醸し出す、あの一種独特な感覚は「何か?」。国際交流基金フォーラムの展示会場で行なわれた「連続トーク」の林道郎氏の講義を通して、「キッチュ」という視点からこれらを解明した。本展実施にあたり、林氏には、ドゥ・ディアの作品を中心としたインドの近現代美術の調査にご協力いただき、本展のカatalogにエッセイをご執筆いただいた。

「ドゥ・ディアの作品から想起する
 キッチュ」という言葉

私にとって、「このドゥ・ディア展への関わりが初めてのインド現代美術との出会いでした。これまでまったく触れたこともなかった。最初は随分迷いましたが、それまでのドゥ・ディアの展覧会図録を何冊か見ましたが、正直に言うとなさげなときたわけではないんです。いわゆる「キッチュ」という感覚を喚起する彼の作品に、一九八〇年代以降の日本や西洋の現代美術におけるポストモダンな「シミュレーション」

ズム」の焼き直しの部分を喰

ぎ取ったような気もします。しかし同時に、なんだか少し異質なザラザラした感覚をも持ちました。さらに、この作家がロンドン

のテイト・モタンで開催されていた『センチュリー・シテ』と題する展覧会に、新しい試みとして「シャッター・ペインティング」

文字どおり、シャッターの上に描かれたペインティング を出品しているというのを聞き、そのザラザラ感が増幅され、これはちやんと見てみたいと思っ

たわけです。それで三月の後半に九日間、インド各地を飛び回ってきました。これがいろいろの意味で、ポテブローのようにじわじわと効いてくる、という体験でした。

その旅の経験については「ここでは割愛して、今日は、僕がドディアの作品を初めて見たときに脳裏に浮かんだ、キツチュ」という概念を足がかりに、ドディアの作品について考えたことをお話ししたいと思います。

僕は、ドディアの作品を複製で見たときの第一印象として、キツチュ」という言葉を想起したと言いました。最終的にドディアの作品が、厳密な意味で「キツチュ」かどうかわかるには、「キツチュ」という概念が厳密な意味で定義可能かどうか(という)ことはさておき、彼の作品を見て「キツチュ」的だと感じるのは、多くの人に共通のことだと思います。そのキツ

チュ的な印象を構成する要素は、いったい何でしょうか。まず思いつく特徴をランダムに列記してみようと思います。

1. キツチュなものの一つの典型として宗教的なイメージあるいは聖なるイメージの世俗化、土産物化、あるいはグッズ化という現象があります。宗教的なイメージが世俗的な商品として加工されたものは、本物に対するま

がいのもの、贗物(贗品の意味)という感覚がもつとも先鋭的に表われるからですが、ドディアの作品にも、インドの神々のイメージや、インドでは聖人的な扱いを受けているマハトマガンディーのイメージ、それもマヌディアとくにポストカードやカレンダーなど安っぽい印刷媒体において繰り返し大衆に共有されているイメージが多用されています。

2. キツチュに特有の装飾欲求がドディアの作品にも買かれています。アブラハムモルブランの社会心理学者(という)キツチュの研究者は、「キツチュ的な物の表面が、広く、何の飾りも持たない」ということはめつたになんと言いましたが、そのとおり、キツチュなものには、基本的にある空間恐怖による成り立っています。たぐさのイメージや形態を詰め込むことによる穴を埋めようとする。ドディアの作品におけるイメージの集積も、そういう

意味でキツチュ的なところがあり

ます。

3. キツチュ的なイメージの集積は、物相互の間、そしてディスプレイの仕方においても厳格な体系がありません(そこがフェテッシュとキツチュの違いかもしれない)。ドディアのイメージの引用、集積においても、しばしば密接な連関性のないイメージが唐突に重ね合わされています。

4. キツチュなものは、看板や造花などのプラスチック製品や、石子順造(一九二九—一九七七、美

術評論家、漫画評論家)が取り上げたような銭湯の背景画に代表される、けばけばしく安っぽい色彩感覚による覆われていることが多い。これも映画の看板を思わせるような方法で描かれたドディアのイメージに通じる。それを逆転させるために、色彩のないキツチュを探し出すことはむずかしい」とも言えます。



『ハイウエイ』(2001年)

しそれは独創的なものではなく、むしろ市民階級に共有された価値観に支えられているを託されたものです。キツチュが夢の生活を演出するインテリアン「レイション」や家具的なものによって最も鮮やかに体现されるのはそのためです。ドディアにも絵画の家具化を意識した作品があり、とてもキツチュ的です。

二〇世紀の「キツチュ」論

キツチュという言葉の起源は英語の sketch だという説や、ドイツ語の不良品や贗物をつかませる「だまして違ったものを売りつける」という意味の verkitschen という言葉だという説があります。正なものは「まがいもの」という「アンズ」があります。アメリカでは、一九三

九年にクレメントグリーンバーグという批評家が「前衛とキツチュ」という論文を発表し、まさに「キツチュのまがいもの」性を前衛の「真実」と対照させて論じました。そのように、二〇世紀の美術史の中で「ことにモダニズムをめぐる言説の中で、芸術を商品化、通俗化、贗物化する敵として、キツチュは常に悪者の役回りを与えられてきたわけだ。しかし、この本物と贗物の対立、あるいは芸術とキツチュの対

立という図式は、六〇年代以降ポップアートの出現などを経て

なしくずしにされ、さらに八〇年代以降、高度資本主義化においてイメージ情報の資本化が加速的に進むと無効化されていくようになります。つまり、現在のわれわれの生活は、芸術であれ広告であれ、すべてのものがまず複製を経て情報化された形で横並びに存在しているというイメージ環境の中にある。その

中では、本物という幻想は、それ自体の価値によって成り立つというよりは、贗物との差によりかかって成立するという事態になっていく。そのようななかで、引用という遊びを積極的に表現として取り込んでいくという動きが続出するのが八〇年代です。「キツチュ」という言葉も、そのなかでポジティブな価値を持つものとして見直されていく。

現在、「キツチュ」という言葉が嫌悪感をもって使われることは稀であり、むしろ「かわいい」とか「おもろい」というポジティブな「アンズ」を伴うことが多いのは、そんな歴史の推移を反映していると思います。

ですから、今我々が出会った「キツチュ」は、六〇年代以前のキツチュ」という感覚とは違つたように感じられる。そのことについて、アブラハムモルブランのことを言っています。キツチュは二つの歴史的阶段を経てきている。一、段階目は、西欧における(市民社会の

興隆期であり、その時期には市民階級は自分たちの日常を形作る価値を絶対的なものと感じて、世界各地へと自分たちの趣味をキッシュなものを通じて伝播しようとする時期で、第二段階は、六〇年代以降とていいと思うのですが、すべてを消費財と考えるネオ・キッシュの時代だといつのです。つまり物が無限に作られ捨てられていく趣味の使い捨ての時代だといえれば、第一段階において、市民たちはキッシュなものに自分たちの理想とする世界の表れを見、そこに希望を託していたのであり、それが第二段階になると、趣味の様式としてつまり生活のアクセサリーとして消費され捨てられるものになりさがるといつわけでは

僕はこのキッシュの二段階のキッシュは、歴史的な大勢がもしれないと思いつつ、同時に、そう画然と分けられるものではなく、常にこの二つの様相の配合においてキッシュといつものを見ていかなければならないのではな

いかと考えます。日本にもキッシュといつ現象に注目した石子順造といつすばらしい批評家がい

ました。彼のキッシュ論には「生活のはばとあつみ」とい

葉が繰り返して出てきますが、彼は一貫して、キッシュなものを、それに託された生活者の感情の裏において観察した人でした。たとえば彼は「いついつこを言

います。キッシュは、一方で伝習的・共同体的な幻影をとどめ、他方で、それを最も私的な自己幻想に還元しつつ表現の匿名性を生かす。つまり、キッシュなもの、たとえばプロマイドや銭湯の背景美術の表現の匿名性、均質性は、それを所有する人の私的な幻想へとイメージを供するための必要条件であり、そのときに救われる私は、失われた共同体の幻影によつて支えられているのではないかといつことではない。

それはグリーンバグ的な見地からすれば、ローカルな共同体に根ざした真正な文化を後にして都市に出てきた労働者たちが、まがいものによつてそれを代替するプロセスだといつことになるでしょう。しかし、だからこそ逆に、そのまがいものに託された甘つたる幸福感やグロテスクな興奮には、現在を否定的に捉え返す契機が隠されている。とも言えるはずで、工場労働に従事する人たちが机上に置くプロマイドや、極楽的なリゾートの写真やピンナップ・ガールの女性の写真が壁に貼り付けられた労働者たちの個室、あるいは、観光の土産物で埋められた中産階級の家庭のリビング。そして、これはインドですつと目撃しつづけたことですが、タクシートの運転手たちが運転席の横に置いたインドウの神像のミニチュアや、キッシュなイメー

ジで装飾するタイヤの泥除け。こついつた情景を想起すれば、そこには必ず、ある種の祈りや、過酷な労働条件への異議申し立てや、そこからの逃避が企てられていくのを感じます。このよう

な「はばとあつみ」がただの消費財へと平板化してしまつたのが八〇年代なのかもしれませ

ん。しかし実際には、現実と夢の齟齬がある限り、キッシュ的なものに託された祈りや感情の「はばとあつみ」が消えてしまつわけはなく、それはこの日本にも存在しつづけている。また南北の経済格差の拡大に伴つて空間的な配置換えを経ながら存在しつづけているものと思

「キッシュ」の脱神話化
ドヤヤの作品がはらむザラザラした感覚は、こついつたキッシュ的なものの背後にこめくはばとあつみに関わるんじゃないかと思つて。そのことを十分に読みとれるだけの生活感情を残しながら僕は共有して

ないのですが、おぼろげながら言えることはいつかあります。まず、インドにおいてキッシュ的なイメージが日常生活に果たす役割の大きさについてです。戦後のインドを語るときに必ず使われる常套句があります。「世界最大の民主主義」とい

うのがそれですが、これは、民主主義国家として世界最大の有権者人口を誇るというだけでなく、投票率の高さを指す表現でもあり

ます。つまり、かなり下層の被識字者たちも選挙に行くといつ状況がある。そついつた状況において、不可触民階級から

もどんどん政治家が出現して、政治が大衆的スベクタクルとして成立する状況があるわけ

です。そのなかで、まさにキッシュな政治家や政党の表象が大きな影響力を持つ。現在の日本でも似たような現象が生じているわけですが、そのもつと過激な状態が各地方で生起しているといつ感じなんだと思つて

実際、ボンベイやカルカッタの街では、政治家の肖像看板や壁画をよく見かけました。また、それ以上に影響力を持つているのは、世界一の生産量を誇る映画

画がもしれませぬ。新聞には、連日映画情報が流され、ケーブルではのべつ幕なしにミュージカルやメロドラマを流しているとい

う環境です。それらの多くが単純化された政治的対立を土壌としており、キッシュ的なイメージが、まさにその安つばさの背後に燃えたいがる人々の欲望を受け止めて、肥大化して

いく。そついつた環境の中にあるドヤヤが、キッシュ的な方法を自分の制作に利用するといつことはこついつたことなの

が、ある意味でキッシュの脱神話化なのかもしれませぬ。僕は、キッシュが抱え込む「祈り」について言いましたが、別の角度から見れば、キッシュなるものは、そのイメージの所有者にとつては、絶対的に純化したものとして

現れるといつことでは、キッシュの実に逆説的な部分ですが、キッシュに託された祈りは、キッシュなものを絶対的位置にまで高めるといつことがある。宗教的なイメージを想起すれば

わかりやすいでしょう。たとえば、さまざまな新興宗教が使うイメージ。オウムの麻原のイメージにしても、足裏診断のあの足裏模様にしても、外から見るとキッシュといつかまさに「ま

が、それを信奉する人々にとつて、あれは絶対的な吸引力を持つたイメージです。ドヤヤは、そついつたキッシュなイメージの効力を、キッシュの方法を用いながら相対化することに次第に関心を持ってきているように思



アトール・ドディア展の展示風景(撮影:上野則宏)



字幕翻訳者は語る 『満月の日の死』から読み解く スリランカ社会

映画上映と講演を組み合わせた「アジア映画講座」シリーズが10年目を迎えた。昨年からはまった「字幕翻訳者は語る」では、地域研究者として第一線で活躍している字幕翻訳者たちが、自ら担当したアジア各国の名作を解説する。今年6月と9月に行なわれた「字幕翻訳者は語る」の中から、スリランカ映画『満月の日の死』を取り上げ、翻訳を手がけたシンハラ文学研究者の野口忠司氏の講演を紹介する。野口氏は、日本でこれまでに上映されたスリランカ映画11本すべての翻訳をしたスリランカ映画の第一人者。映画を通してスリランカの庶民の暮らしや人生観を理解する。



上:息子の墓に立つワンニハーミ。『満月の日の死』より©NHK1997
下:ブラサンナ・ヴィターナゲー監督©NHK1997

野口 忠司(のぐち ただし)

1944年、滋賀県生まれ。スメラ日本文化研究所(スリランカ)所属、シンハラ語辞典編纂室主幹。現代シンハラ文学研究を中心にシンハラ語、戯曲、映画などに関心を寄せる。著訳書に『淡き人生』(レイクハウス社)『ころ』(夏目漱石・レイクハウス社、ゴダゲー出版再版)『シンハラ語の入門』(大学書林)『シンハラ語辞典』『日本語シンハラ語辞典』(大学書林)など。主な字幕翻訳作品に、『運命線』『川のほとり』『改革の時代』『蓮の道』『その橋の下で』『長女』『大都会』『日が沈むところ』『心の闇』『マザー・アローン』『サロージャー』など。

『満月の日の死』Death on a fullmoon Day
1997年/カラー/75分/スリランカ/監督:ブラサンナ・ヴィターナゲー/出演:ジョー・アベーヴィックラマ、ナヤナ・ヘッティアラッチ、プリヤンカ・サマラウィーラ

1983年以来、スリランカ北東部を拠点に分離独立を掲げる過激派タミル・イーラム解放の虎(LTTE)とスリランカ政府軍が戦闘を繰り返している。当初の民族紛争から内戦状態へと発展し、今日ではLTTEのテロ活動と位置づけられる紛争へと変容している。

この映画の舞台となる古都アヌラダプラは島の北中部州に位置し、目と鼻の先に激しい両者の戦闘地がある。この町はずれの村にワンニハーミ 盲目の老人と末娘スナンダーが細々と暮らし、一家の大黒柱である息子バンダラは政府軍の兵士として前線に赴いている。

スナンダーの恋人ソーメーはレンガ職人だが貧しく、結婚資金もなく、報酬のある軍人になるべきか決断しかねている。その矢先、柩に収められた息子の遺体が政府軍の手で実家にかつぎ込まれる。息子の殉死に疑問を抱く父ワンニハーミは、政府から支給される弔慰金の受け取りを拒む。しかしソーメーはこの金があれば貧困から解放され二人の結婚も可能になると思い、スナンダーに父親を説得するよう勧める。一方、村吏はワンニハーミに貸した借金をこの賠償金で返済してもらおうとする。こうした最中、息子の遺体確認をしようと、ワンニハーミは埋葬された柩を掘り起こした。が、柩の中に収められていたのは、石と丸ただけだった。



本国では
上映禁止された映画

『満月の日の死』は、海外ではかなり上映され、数々の賞も獲得しましたが、スリランカ本国では上映禁止となっています。今日はスリランカの方もたくさんいらっしゃるのですが、初めてご覧になった感想を後ほどお聞きしたいと思います。

スリランカでは一九八三年に民族紛争が起りました。最初は大多数を占めるシンハラ人とタミル人の民族紛争でしたが、その後内戦と呼び方が変わり、昨年来日したスリランカの外務大臣は、紛争でも内戦でもな

く、テロ活動ととらえるのが正しいのではないかと講演でしゃべっていた。そうした社会的、政治的な背景の中で、上映禁止の真意がこの映画の後半に見られた気がします。

しかし枢の中に石が詰められることは、スリランカの方もよくご存じだと思いますし、日本のかつての戦争でも同様の事実があったので、なぜこの映画が禁止になるのか理解に苦しんでいます。また監督も不服の申し立てをして、今、裁判にかけている最中です。僕の知る限りでは、去年の十一月ごろに結審するはずだったんですがいまだに解禁されていない事情から見て、スリ

ランカではまだ自由な製作ができないんじゃないかという気もします。

それではスリランカの映画事情についてお話しします。まず年間に製作される本数ですが、五〇年代は毎年二丁六本程度。六〇年代から七〇年代は、スリランカ映画史の黄金時代といわれていますが、よつやく七〇年代になって十三丁二十二本。民族紛争が起きた八三年には、三十八本の映画を作っています。過去五十年間でスリランカで製作されたシンハラ映画は、八百五十二本になります。隣国インドは映画王国で、一年間に約八百本作られています。比較にはなりません、いかに苦しい映画製作をしているかがうかがえると思います。

スリランカでは、シンハラ映画のほかにタミル映画や英語の映画も製作されています。タミル映画は六二年に初めて作られ、これまでに二十七本製作されています。英語の映画は、四半世紀の間に七本です。こういった数字からも、製作事情が理解できると思います。

次に上映する映画館についてです。スリランカで製作されている映画のほかに洋画もあればヒンディー映画も入ってきます。その結果、スリランカ映画のシェアはわずか四分の一しかないのです。そして映画黄金時代には、三百軒の映画館があったといわ

れています。八三年の暴動以来、その多くが焼き討ちされ、残念ながら貴重なフィルムもたくさん失われました。またそのころからテレビが普及し、テレビドラマが多く製作されるようになり、映画産業は斜陽となりました。ですから映画人たちは苦勞しながらいい作品のために日々努力をしています。

『満月の日の死』は、九七年のアジアフィルムフェスティバルのために作られたものです。NHKが、スリランカ、マレーシア、台湾、ウズベキスタンの四方国の若手映画監督に依頼し、助成金を出して映画を作ってもらおうという試みでした。この四方国の中で一番早く台本ができ上がり、一番最後に製作が終わった国が、スリランカでした。その証拠として三回目と四回目の書き直しの製作台本を持ってきました。一回目と二回目は見つからなかったのですが、最終的に監督は五回書き直しています。

映画の中ではバンダラという息子は、手紙の文面にだけ登場しました。しかし最初の台本では、バンダラが戦争によって負傷して、そのリハビリをしている情景などが克明に描かれていた。政府も許可しており、軍の病院でロケをする予定だったのです。

おもしろいなと思って一度目の台本を訳したわけです。しかし数週間後に、ストーリーが書

き換えられてくる。これでおしまいかと思ったら、また三回目がある。もういいかげんにしてほしいのに、また四回目が来てさらに五回目が届いた。この映画祭は九七年の十二月十三日から一週間行なわれましたが、原訳(すべての音を聞き取り、書き出し、日本語にする作業)が僕の手元を離れたのは十一月二十七日です。それからわずか二週間、日本語の字幕を監修される方が手を加え、さらに僕と協議しながら一番ふさわしい言葉を選び、そして英語の字幕の専門家に渡っていったわけです。わずか二週間といいましたが、これはまだいいほうなのです。映画祭が始まって、でき上がらずにホテルに缶詰でやるケースもよくあります。だから二週間前というのは、まだ時間的には十分余裕があったと考えることもできます。この仕事は綱渡りで、ぎりぎりの線まで努力を重ねてできるものです。

映画の製作過程でもさまざまなたづねがあったようです。ロケの移動中に監督が人身事故を起こしたり、製作費に行き詰まった監督が、自分の車を手放さなくてはいけなくなったり、結婚指輪まで売ったことも伝わってきました。そこでNHKの方が、急遽スリランカの製作現場に飛んで行きました。果たして映画はできるのか状況を聞き、打ち合わせをしたという話も聞きました。そしてち

よつと三年半前、この会場国際交流基金フォーラム)で初めて上映されたのです。

「世界的なレベルに」という監督の信念

監督のブラサンナウイタイナゲーは、当年三十九歳。物静かで洞察力の鋭い監督だな、というのが最初の印象でした。いろいろなものを読んでいて、その知識を映画に生かそうという気構えがひしひしと伝わってきました。また映画は世界共通の言葉なんだという強い信念を持っていて、スリランカ映画を、世界的なレベルにする努力をしていることを熱く語っておられました。

九二年、彼が三十歳のときに最初に作った作品は、燃える氷(Sisila Gini Gan)という映画でした。これは男優賞など九部門で賞を獲得した。九五年に『心の闇』(Anantha Rathriya)、九七年に『城壁』(Pawuru Walaalu)を作りました。『心の闇』と『城壁』はアジアフォーカス福岡映画祭で上演され話題になりました。そして九七年に第四作の『満月の日の死』を作っています。

一作目は、残念ながら見ていませんが、『心の闇』は、人間世界の内面を描こうとした作品だといわれています。配色や色の使い方で、登場人物の人生観を表現しています。例えば青や灰

色は悲しみや絶望感を表わす。緑は感情がなく、法廷で裁かれるシーンで使われている。そして子供たちが水浴びしているような「トルメンカラー」は、幼い子供の純朴、喜び、希望、純真さを表わしています。

『城壁』は、逆に人間の外面の世界を描こうとした作品です。人間は共同体の中で生活をしていきますが、一つボタンをかけ違うと、一八〇度変わった人生になってしまうという世界を描いています。

『満月の日の死』は、人間の尊厳を追求した意欲作です。それゆえに試行錯誤を重ねてストーリーを作り直したんだと思います。率直に言つと、一回目の製作台本には感動したんです。それが二回目、三回目となると、だんだんおもしろみが減ってきました。そして五回目には、それまで出演していた俳優らは画面から消えて、声だけしか出てこなかったのです。一番中心である息子を登場させずに、盲人の父親を主役にしたわけです。盲人であるワン・ハミの名前のつけ方にも意味があります。最初は別の名前でした。舞台となった北部地域はワンミという地名です。ハミというのは男性に對する言葉、ハミミナーというのは女性につける言葉ですが、その地域の代表者という形でワン・ハミという固有名詞を使っているわけです。細かく分析して

いくと、監督の力量のすばらしさを感じます。

そして一回目の台本からこの映画を見てみると、盲人は一つのシンボルだと思えてくるんです。社会的に見て非常に弱い立場の貧しい農村の人が、内戦によつて息子を亡くす。弔慰金として一万里ドローというわずかなお金が国から支給される。一ルビーが一円五十銭ぐらいの時代ですから日本円にして一万五千円に過ぎない。この命の軽さに対する怒りや悲しみが出てくるのです。そして弱い立場の人々の声なき声を代弁する形として、足の不自由な人や耳の不自由な人ではなく、盲人にしたころにも監督の鋭い洞察力があったと解釈しています。

次に、主役のジョー・アペーウツクラムについて紹介します。彼はこれまでに百本以上のスリランカ映画に出演しています。僕が留学していた六〇年代の初めには、映画館に行けば必ず彼を見ることができた。当時はコメリアンで、彼が登場すると映画館のどこからともなく拍手が起るほどの人気俳優でした。ところが六〇年代後半からコメリアン役を避けるようになり、七〇年代からシリアスな役柄を選び挑戦してきたように思います。彼が日本で最初に紹介されたのは、八二年。国際交流基金創立二〇周年記念で、南アジア映画祭が開催されたときに、ジャン

グルの村(80)と川のほとり(80)が初めて上映されました。この二本が日本に最初に紹介されたスリランカ映画ですが、『ジャングルの村』は、スリランカの巨匠、レスター・ジエームスピリス監督の作品で、この映画の主演を演じているのが彼であり、日本でも高く評価されました。役柄を離れてもコメリアンがあつても、素晴らしい人物です。

スリランカの人々にとつての「満月」とは

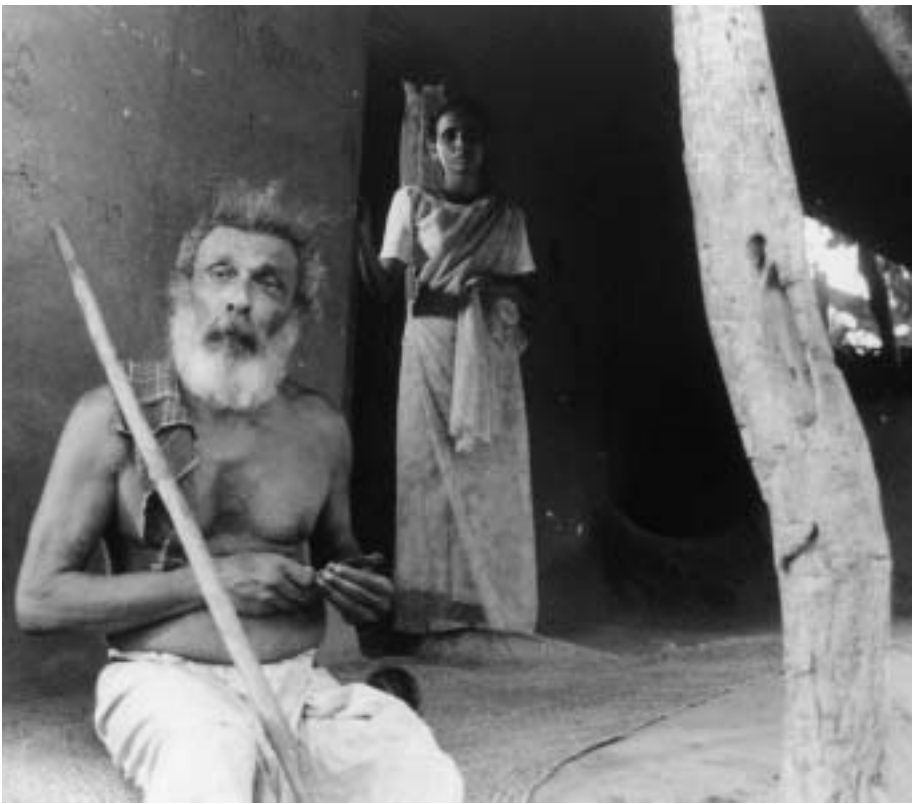
日本で紹介されたほとんどのスリランカ映画の字幕を担当しましたが、苦労を感じたことはありません。知らない新しい言葉が出てきたり、辞書がない田舎の方言が出てきても、繰り返し聞いていけるとそのうち理解できるので、そういう意味でも苦労した経験はありません。

ただ先ほども言いましたように、一回でできる仕事を五回やることがあります。製作台本が送られてくるケースが多いのですが、あくまでも製作台本ですから、本番でフィルムが入ってくる時にはストーリーや状況が違っている場合が多いのです。一時間十五分ぐらいの短い映画だとそれほどでもないのですが、映画祭では二時間半を超える映画も珍しくありません。以前に、長いもので非常によくできた製作台本があり、実に細かく

状況が書いてありました。これはすぐやれると思いい、うれしくなって仕事を進めたところ、最終的なビデオを見たら中身がまったく違うんです。あれは暑い夏でしたが、またやり直しということで、シヨクのあまり倒れました。でも、そういうことは覚悟しないとけないのです。

また人が短時間に読める文字数には限りがあります。平均的な日本人で一秒間に字幕で読める文字の数は四文字といわれています。だから例えば冒頭シーンで、原訳では、言うてくれれば水がめを持ってきてあげたのに」という場面がありますが、これで三十字ぐらい。しかし画面はちょうど水を汲んであげたのに」といっているから、汲んであげたのに」となる。「わしを半身不随とでも呼びたいのか」というせりふは「わしにはできません」となるわけです。はつきり言うて原訳と字幕は、ずいぶん変わるものです。しかし大切なことは、ストーリーを的確にとらえて、「コメリアンを醸し出す言葉に作り変えること。ですから経験、技量、能力、感性といったものが要求されてくるわけです。楽しい苦労がつきものです。

最後に、スリランカ人にとつての「満月」についてのシヨクをお話します。ここに三人の宇宙飛行士がいます。アメリカ人と日本人とスリランカ人。無事に月に着陸すると、アメリカの宇宙



『満月の日の死』のワンニハ-ミ役、ジョー・アペーヴィックラマ 手前 ©NHK1997

飛行士は地質調査を開始しました。次に日本の宇宙飛行士も負けじと調査に入りました。ではスリランカ人の宇宙飛行士は何をしたか、という質問です。ヒントを出しますと、満月というのはシンハラ語で「ブラサンタ」です。これは文語的な言葉で、普通は満月の日のことを「ポヤダワサ」と言います。

実は満月の日は、スリランカでは休日です。この日はスリランカ人の宇宙飛行士は、月に行つて毎日満月なので休日だったので

す。だから正解は、宇宙飛行士は何もしなかったという話です。では皆さまからの質問を受け付けたいと思います。

スリランカの仏教と僧侶と暦

映画では満月はかりでした。何か意味があるのでしょつか。野口 欠けた月はワンカットも出てこなかったと思います。満月にはいろんな意味があります。この日は敬虔な信徒は白装束

でお寺にお参りし、お経を唱え、心安らかに五戒とか八戒とか十戒といつ戒めを守つて一日を過ごします。満月の日は、仏教徒にとつて聖なる日です。同時に、人間の血が騒いだり、何か悪いことが起こるといふ逆の考えもあります。この映画は、マイナスの部分で満月をとらえたのだと思います。

野口 スリランカの方が、どのような感想をお持ちになつたかお聞きしたいと思います。スリランカの方、いかがですか？

スリランカの信徒は、亡くなる七日後、三カ月後、一年後に法事をします。これは残された家族たちのつとめです。だから父親であるワンニハ-ミ以外の人間は、自分たちのつとめとして、バスター息子がこの世で犯した罪を浄化するために、法事をしようと思つていますが、それがないために苦しみま

す。それに対して父親であるワンニハ-ミは、息子の死をかたくなに信じません。そのところがよく描かれていると思つていました。野口 僕も最初に見たときに

気がきましたが、柩を家に運び込んだとき、柱に当たつてポトンと音がしました。必ず後で何か起こるなと思つていたので、結果が納得できました。ここでも監督の緻密な計算が感じられます。

スリランカでのお坊さんの役割を教えてください。

野口 大都会と違って、田舎の共同体は、寺を中心にして動いているように見受けられます。僧侶は社会的に一番高い位にいるので、例えば橋やバス停を作る場合、僧侶にお伺いする。住職や村長の言葉に、村人は従うところがあります。ポヤダワサには、信徒を集めて釈迦のありがたい言葉を聞かせたり、お経を唱えて解説し、社会浄化のために説法をすることも僧侶としての使命です。

ただし批判するわけではないけれども、僧侶の意見に従つていう習慣は、決していい面だけとも言えません。私がまだ学生のときに、コロンボから離れた片田舎に、日本から農業調査団が来ました。日本の農業技術を普及させるための調査で、農家はクワが何本あるか、スキが何本あるか、水牛は何頭飼つているか、というのをアンケート用紙に正確に記入してくれるように村人に説明をしました。

「非常によくわかつた」というので、一週間後に「コロンボから回収に来るから、そのときまでに書き込んでおいてください」と頼んで帰りました。一週間後、アンケート用紙を回収してみると、同じ数字しか書いてないんです。説明したのと違つたやないか」と言つて、「お坊さんがそう書いておけばいいと言つたから」といふわけです。これがデータの正確さに疑問をもつた最初

です。つまりこの影響力は、悪用されれば選挙にも利用できる可能性を含んでいるのです。

野口 現在では太陽暦ですが、かつては太陰暦で、仏教の祭りはずべて太陰暦で決まります。現代の生活は、お釈迦様が住んでおられた二千年前とは違いますが、僧侶は二千年前の生活はできないのだから仕方がないので、六〇年代後半に、僧団の姿が崩れているといわれた時代があるんです。

そこで僧侶の威信回復のために、一年間だけ月の運行に合わせてポヤカレンターが実施されたことがあります。上弦、下弦、満月、新月の日をすべて含めてポヤといいますが、ポヤを休日にしたのです。これは世界経済の動きから見て完全にマイナスです。ほかの国では平日なのに、スリランカはポヤで休んでいたわけですから、当然貿易関係においてとくに支障をきたしました。それはわかつていたんですが、とにかく一年間ポヤカレンターにしたのです。非常に不合理なため、すぐに今の暦に直されました。しかしポヤは信徒の都合お休みですし、イスラムは、礼拝の日である金曜日に休みました。もちろんクリスチャンは日曜日が礼拝日といふことで、休暇が非常に多い国だといふことも言えます。

2001年度第1期
「マレーシアを学ぶ～多民族国家の多面的理解のために」
ブルネイとシンガポールのマレー人

金子 芳樹(獨協大学外国語学部教授)



ブルネイのスルタン・ハサナル・ボルキア・モスク(世界有数の豪華「ハイテク・モスク」)

もともとマレー人や中国系、インド系の人々がそれぞれに住んでいた地域を、後から切り取るようにして国家ができたため、多民族国家となったマレーシア。国内ではマレー語や英語、中国語やタミル語が使われ、宗教によって生活様式が異なり、さらに特定の民族を優遇する政策がとられている。同じように民族構成が複雑なブルネイとシンガポールは、現在のマレーシアとともにマレーシア連邦の一部となる予定だったが、それぞれの事情により独立し、マレーシアとは異なる道を歩んでいる。3国はなぜ同じ国にならなかったのか、そして複雑な多民族国家をどのように運営しているのか。ブルネイとシンガポールにスポットを当てる。

2001年度第1期のアジア理解講座では、「歴史で見る日韓中の文化交流」「アジアにおける格闘技とスポーツ」「マレーシアを学ぶ～多民族国家の多面的理解のために」の3講座を開講した。「マレーシアを学ぶ」では、多民族、多文化、多宗教社会といった東南アジアのエッセンスを抱えた国家のさまざまな問題を取り上げた。全10回の講義のうち、金子氏による講義の一部を紹介する。

民族構成比から見た
マレーシアとブルネイと
シンガポール

マレーシア、ブルネイ、シンガポールを、基本データから紹介しましょう。まず円グラフにした民族比率でマレーシアとシンガポールを比べると、マレー人と華人の占める比率がまったく逆になっています。これが、両国が分離せざるを得なかった一つの大きな理由です。また政治体制については、マレーシアは立憲君主制で、九つの州のスルタン(イスラム統治者)が五年ごとに順番で国王になるというシステムです。現在は、一回りして第三ラウンドの二人目ですね。これに対してブルネイは、完全な世襲制のスルタン親政です。一方シンガポールは共和国で、直接選挙で大統領を選びます。

マレーシアとブルネイはイスラム教を国教と定め、国家が積極的にその普及を図る。片やシンガポールは政教分離で、政府は宗教活動をしない。民族政策に関しては、マレーシアは「3M」政策(マレー人優遇政策)を採用しています。ブルネイもマレー人優遇政策をとっていて、マレー人以外は国籍をとることに難しい。これに対してシンガポールは能力重視の平等主義を標榜しています。

この三国が一番接近したのは一九六二年です。マラヤ連邦の初代首相が、イギリスの植民地だったシンガポール、サバ、サラワク、

ブルネイをマラヤ連邦に合併させてマレーシア連邦を形成しようとして提案した。最初はみなこの話に乗りましたが、ブルネイは交渉の最終段階で拒否。石油の利権が理由という見方が強いですが、もう一つ、スルタンの地位の問題も絡んでいたようです。マラヤに合併した場合、マラヤにはすでに九人のスルタンがいるので、ブルネイのスルタンは一〇番目となり、五〇年に一度、五年間国王になるだけ。国王としての権威は一〇分の一になってしまいます。そこで、小さくても一国の王でありつつける道を選んだというわけです。また合併後の民族政策をめぐって、マレー系と党内のマレー・ナシヨナリスト、マハティール現マレーシア首相)とシンガポールの当時の州首相リクアンユ(現シンガポールの上級相)らが激しく対立し、結局シンガポールは六五年に分離独立となりました。

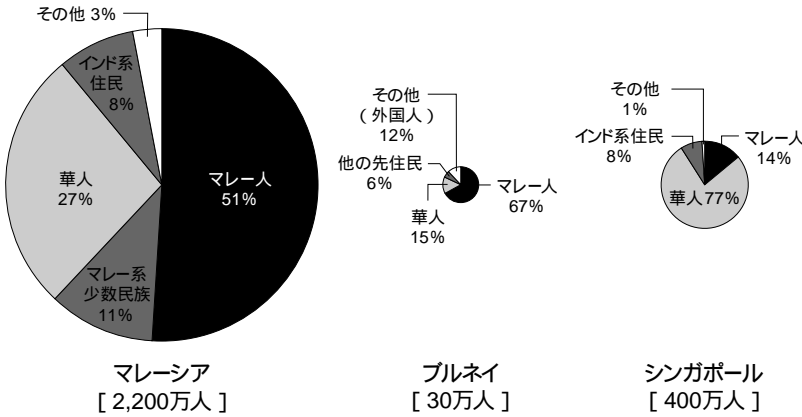
三国の関係を見ると、マレーシアとシンガポールは反目の様相が強い。逆に民族構成は違うものの、ブルネイはシンガポールに近く、金融政策、安全保障などの面で依存しています。例えば為替管理については全面的にシンガポール政府任せだし、ブルネイ国内にシンガポール軍が駐留しています。一方、マレーシアとブルネイは民族構成やイスラム政策は近いですが、似ているがゆえに互いに牽制し合うところがある。

ブルネイの事情

ブルネイは実質的には専制君主制に近い政治体制となっています。一九八四年の独立以来、国政選挙をしたことがなく、議会を開いたこともない。五九年に最初の憲法が制定され、議会制や議員の公選に関する規定ができたものの、実際には実施されることがない。その原因の一つは、六二年のアザハリの反乱王制打破を目指したクーデター)です。この反乱に対してスルタンは非常事態を発令し、以後、民主的体制下での独立に難色を示すようになりました。非常事態令自体は他国でも珍しいことではありませんが、六二年に発令された非常事態令が解除されずに、現在まで一貫して継続しているというのはかなり異常な状態です。独立後は、長男のハサナル・ボルキア国王が、首相、国防相、内務相、蔵相を兼務、さらに次男が外相、四男が第二代蔵相と、閣内の要職をこごとく王家が占めてきました。ただし側近政治の色合いが強く、実際には取り巻きが国政を動かしているのが実情です。

デモクラシーの要素が欠落しているにもかかわらず、反政府運動やゲリラ活動が起きない背景には、王様による臣民への豊富な「施し」があるといえます。それを支えているのが石油収入です。政府の国家予算は収支が合うこと

三つの国のマレー人



がなく、不足分は王様が賄っているともいわれています。国民の生活は、所得税なし、教育や医療は無料。石油の恩恵を得て、高収入・高福祉が実現しているのです。とくにマレー人の大半は公務員として身分と収入を保障され、さらに無利子の住宅ローンの提供といった優遇を受けています。マレー人以外が公務員になるのは難しく、華人のほとんどはビジネスマンです。石油の枯渇を見越して、政府は産業の多角化

民族と国家

	マレーシア	ブルネイ	シンガポール
人口(万人)	2,200	30	400
面積(km ²)	37,000	5,770	647
一人あたりのGDR(US\$)	3,500	17,400	26,000
政治体制	立憲君主制(スルタン互選)	スルタン王制	共和制
国教/国語	イスラム教/マレー語	イスラム教/マレー語	政教分離/4公用語
民族政策	プミトラ政策	マレー人優遇政策	能力主義(平等主義)

や輸出志向産業の育成、インフラ整備などに取り組みはじめましたが、国民としてはわざわざリスクを払ってベンチャー事業に乗り出す必要はないので、国の政策は遅々として進んでいません。こつこつ状態の中で国民をまとめていくのがスルタン制とイスラム教といえます。イスラムの教えに忠実に従って生活し、その中心にスルタンがいて国民を束ねる、というのが理想像です。ですからイスラムの戒律については厳

シンガポールではマレー人は少数派です。橋の先五〇〇メートルのマレーシアに行けばマレー人が優遇される世界がある。しかしシンガポールは平等主義ですから、特定の民族が優遇されることはない。その中で多数派の華人の経済発展が目覚ましく、一方マレー人の発展は遅れがちになる。こうして生じたギャップをどう埋める

格で、東南アジアでは一番厳しいでしょう。中東に非常に強いパイプを持っているのも特色ですね。マレーシアのイスラムよりも自分たちのほうが中東、つまり本家に近いという自負がある。先代および現在の国王がそれぞれ建てたモスクは大きくて豪華だし、宗教省の新しいビルは、私が見たブルネイの他のどの建物よりも立派でした。国民と王様とのつながりを紹介しましょう。まず国王は、かなりこまめに国内を回る。イベントがある地区に気軽にヘリコプターで降り立ち、周囲の人と握手したり、地域の長の家に入り込んで直訴を受ける。橋や道が壊れた場合には、行政に修理を求めるところは可能ですが、ある村長は行政ルートで頼むと一年はかかるが、スルタンにお願いすると一週間だ」と言っていました。そのようなスルタンの存在が国民の求心力になっていると感じます。

シンガポールの事情
九〇年代に入ると、産業の高度化やIT化、人的資源の開発などに力を入れ、国家をあげて経済競争力の強化に邁進しはじめた政府にとって、マレー人社会における経済的停滞、少年非行や犯罪の増加、麻薬や家庭崩壊などは、解決を急ぐべき深刻な問題となりました。しかし華人主体の政府にとってマレー人社会の問題に介入することは民族的にやっかいであり、また行政コストの面からも厳しい。そこで政府は、マレー人社会に古くからある「ムニニティ・ペー」の団体や宗教団体にこれらの問題解決を委ね、政府は資金面などで側面から支援することにしました。

かがこの国の大きな課題です。シンガポールは当初、マレーシア連邦の一部となるはずだったが、イスラム行政は連邦政府に任せなければならない、と考えていました。しかし分離独立となつたので、華人主体の政府がイスラム行政制度を整えなくてはならなくなつた。イスラムは種々の戒律があり、生活習慣の中に入り込んでくる宗教です。一般の民法はあつても、イスラム教徒の相続や婚姻についてはイスラム法を優先させているマレーシアと同様、シンガポールもそのような法体系を整える必要があるし、モスクも作らなければならぬ。政府として何らかの手当てをすることが求められたわけです。

シンガポールの多くのマレー人に、隣のマレーシアはマレー人というだけで優遇されている。羨ましくはないか? という質問をしてみました。それに対して、苦勞はしたが、切磋琢磨してきたからわれわれはこれだけになった。保護されるばかりじゃあこまになれなかつただろう。だから六五年に海峡を渡らなかつたのは正解だった」と言っています。六五年八月のマレーシアから分離独立する前夜、マレーシアのラマン首相が、シンガポールに暮らすマレー人たちに、「同じ国の国民であるのは今夜が最後です。もしマレーシアに帰ってきたらどうぞ。今晚だけはドアを開けてお待ちしています」と呼びかけた。しかし実際に海峡を渡ってマレーシアに帰つたマレー人は二〇〇〜三〇〇人とごく少なかったといえます。今にしてみれば、自分たちのほうが進歩している」とシンガポールのマレー人の多くが言います。もちろん、だれもがそう思っているわけではないでしょうが、このような意識の人が少なからずいることに驚きました。

シンガポールの多くのマレー系諸団体の多くは、このような政府の政策に同調し、多くの課題に取り組むと同時に、英語が得意であることやITに精通していることなどを生かして、世界のイスラム教徒をネットワーク化する計画などを進めています。シンガポールの多くのマレー人に、隣のマレーシアはマレー人というだけで優遇されている。羨ましくはないか? という質問をしてみました。それに対して、苦勞はしたが、切磋琢磨してきたからわれわれはこれだけになった。保護されるばかりじゃあこまになれなかつただろう。だから六五年に海峡を渡らなかつたのは正解だった」と言っています。六五年八月のマレーシアから分離独立する前夜、マレーシアのラマン首相が、シンガポールに暮らすマレー人たちに、「同じ国の国民であるのは今夜が最後です。もしマレーシアに帰ってきたらどうぞ。今晚だけはドアを開けてお待ちしています」と呼びかけた。しかし実際に海峡を渡ってマレーシアに帰つたマレー人は二〇〇〜三〇〇人とごく少なかったといえます。今にしてみれば、自分たちのほうが進歩している」とシンガポールのマレー人の多くが言います。もちろん、だれもがそう思っているわけではないでしょうが、このような意識の人が少なからずいることに驚きました。

情報公開は市民社会をひろくか アジアに広がる 情報公開法制定の動き

三木 由希子(情報公開クリアリングハウス)



情報公開アジア会議のNGOによるパネルディスカッション

今年4月、日本で情報公開法が施行された。行政の持つ情報を公開することで、公害や薬害、政治汚職などを市民が監視できるシステムが整ったのだ。しかしこれをどのように活用していくかは、市民の手に委ねられている。日本に先んじて情報公開法が施行された韓国やタイをはじめ、情報公開に関する共通の問題を抱えたアジアの国々と連携し、自由な情報の流れを作り、市民の権利を強化しようという動きがある。アジアセンターの2001年度の公募助成事業「アジア地域の情報拡充を進めるためのネットワーク構築と情報共有のための国際会議とWEBの開設」を紹介する。

アジアでも進む 情報公開法制定

二〇〇一年四月、日本では情報公開法が施行された。これに先立つこと一九九年前、一九八二年に山形県最上郡金山町で、自治体で最初の情報公開条例が制定され、日本では自治体を中心に情報公開制度が発展してきた。一方、世界に目を転じてもかつての情報公開制度が欧米に

しが存在しなかつた時代はとうに終わりを告げている。近年、世界的に急速に進んだ民主化によって世界各地で民主的な新憲法が制定され、その中には情報への権利をつちけているものが少なくない。そして、その権利を具体的に保障する法律として情報公開法の制定が進みつつある。

アジアもそうした動きの例外ではない。日本に先立ち一九九六年に韓国・タイで相次いで情報公開法が制定され、既に実施されており、インドではいくつかの州で情報公開条例が制定されているだけでなく、現在国会には情報公開法案が提出されている。この他にも、インドネシアでは国民評議会で情報公開法案の準備がされる一方で、NGOサイドでも情報公開法案を国會議員も巻き込んで作成しているなど、アジア各国で情報公開法の制定に向けたさまざまな動きが見られる。

こうした動きを後押ししているのは、市民の存在である。長年、「政府」といえば秘密主義の温床であり情報の非公開が当たり前という時代であったが、今や政府は市民からアカウンタビリティ(説明責任)を果たすことを強く求められるようになってきているし、それに応じざるを得ないほどに市民社会の存在が無視できないものになっていると言えよう。そして、教育の問題を抱えていたり、多言語社会で

あるために、市民の権利を平等に擁護していくことが難しいなど、社会状況や背景は各国それぞれに異なるところであるが、情報公開制度が民主主義の基本であり、政府だけでなく社会の公正性と透明性を高めていくために不可欠なツールであること、そして市民主体の社会とするために非常に重要であることは、今や共通認識となっている。

情報公開法がもつ意味

ところで、情報公開法の意義とはどのようなものなのだろうか。情報公開法は、簡単に言うと行政機関や公的機関が保有する情報の公開を求める権利(開示請求権)を私たち一人一人に保障し、その権利を行使するための手続きや公開・非公開の判断基準などを定めた仕組みだ。対象となる機関は各国の法により異なり、日本では行政機関のみが対象となっているが、韓国では国会・裁判所も含むし、タイでも国会は含まれている。情報公開制度の最大の意義は、この「開示請求権」にある。例えば、日本の憲法には「国民主権」とあるものの、私たちが主権者として政府の情報にアクセスすることは、残念ながら容易なことではない。また、フィリピンのように憲法では情報請求の権利が規定されているものの、具体的な手続きや基準がな

いたため政府職員の裁量によって情報が出たり出なかつたりしてしまつ。もちろん情報公開制度がなくても、市民が政府に対して必要な情報の提供を求めることはできるが、これはあくまでも「お願い」をしているに過ぎない。そのため、情報を提供するかどうかは政府の裁量に委ねられ、とても市民と政府が対等な関係のもとで情報の公開が進むことは期待できない。しかし、

情報公開法が保障する、開示請求権によつて、この関係は大きく変わる。市民は権利として情報を求め、政府にはそれに応える義務が生じる。さらに、市民が非公開の決定に不服のある場合は、不服申し立てや裁判という方法で非公開の決定自体を争うことができるようになる。情報公開法により、ようやく主権者である国民の手に政府の情報公開する手続きが整つたことになり、この市民と政府の関係が、情報公開制度によつてもたらされる最大の果実と言える。

法の制定がもたらす新たな課題

しかし、情報公開法は、一方で市民に対して新たな課題ももたらす。先に述べたように、情報公開制度は開示請求権を保障しているものの、それによつて自動的に情報が公開される仕組みではない。逆説的に言つて、

市民が政府に対して情報を求めなければ何も公開されない仕組みなのである。つまり、情報公開が進むかどうかの一方のインシヤティブは市民にあるのだ。もちろん、情報の公開請求を受けた政府が積極的に情報を公開しなければ情報公開は進まないが、まずは市民からの請求がなければ何も始まらない。

日本においては、二〇〇一年四月一日現在で情報公開法が施行されているほか、自治体でも二一三二一団体で情報公開条例が制定されている(総務省調べ)ことからわかるように、情報公開制度は広がりを見せ、市民にとっては身近な仕組みになった。しかし、一方で情報公開制度を利用して人々はまだまだ限られている。事実、情報公開法の施行を単なる「コース」としてとらえた人も少なくないだろう。情報公開の必要性について異論はないだろうが、それを本当に進めていくためには、情報公開制度を「コース」として見るのではなく、制度を使う市民の存在が必要なのである。

さらに言つと、情報公開制度は情報を公開させるための手段に過ぎない。もちろん、情報公開制度を使って情報公開請求をしても非公開とされる可能性は常にあり、情報を公開させることを当面の目的とすることは何らおかしくない。しかし、情報が公開された場合、それを

どう利用するのか、という視点がさらに重要だ。もし、情報が公開されても私たちが何も問題提起や政策提案などをしなければ、行政には情報を公開したけれども何も意見はなかつたという口実を与えるだけになる。情報公開法の制定は、市民が政府を監視、あるいは社会問題を自ら解決するために政府に参加していくための道具を手に入れ、ようやくスタートラインに立てたに過ぎない。これからは、政府の秘密主義を単に非難して情報の公開を求めるだけでなく、公開された情報をどう使うかを問われてきている。

自由な情報の流れを作り出す

こうした状況に的確に対応していくために必要なことは、各国のNGOが互いの経験を学びあふことだ。例えば、日本では自治体を中心に情報公開制度が発展し市民によって利用されてきたことは、アジアの中でもあまり知られていない。しかし、日本は情報公開制度やその運用の多くを欧米から学んできているし、それが日本の情報公開を進めてきた側面もある。これまでは、とかく欧米の制度を学ぶことが多かったが、アジア各国で互いの経験を学びあふことは、それぞれの情報公開制度の発展、あるいは情報公開法制化の

促進に当たっては重要だ。

情報公開クリアリングハウスでは、情報公開法の制定だけでなくその後の運用や市民の利用状況などを情報交換するために、今年四月、「情報公開アジア会議 市民社会をひらく」を開催した。情報公開法が未制定の国においては、法の制定が急務だが、一方で情報公開法は立法以上にその運用が何よりも重要である。運用が伴わなければ、法の実効性は確保されない。情報公開に関して、常に記録の作成・管理、非公開の範囲など実効性をどう高めるかという課題があり、これらはいかなる社会においても共通の問題である。こつした問題については、その克服のため経験の共有と連携が、情報公開を進めていくためには必要である。それぞれの経験を共有するなかで学びあふものは多く、今回は、韓国、タイ、インド、インドネシア、フィリピンからNGO、学者、ジャーナリストなどを招いて会議を行なつたが、こつした会議を通じてできたネットワークを生かして効果的に情報交換と発信を続けるためのウェブサイトの上立ち上げを、この二月を目途に行なうことにしている。国境に関係なく自由な情報の流れを作り出し、市民の権利を強化していくなかで、市民社会をより強固なものにしていきたいと考えている。

日陰と風を呼びこんで

マレーシアの伝統的住宅に学ぶ

滝口 健(国際交流基金クアラルンプール事務所)

八月三十一日はマレーシアの独立記念日です。首都クアラルンプールでも市内の至る所で祝賀行事が行なわれました。そのハイライトの一つが、世界一高いビルペトロナスツインタワーのライトアップです。一九九六年完成のこのビルは、高さだけではなく、壁面のステンレスの銀色と未来的なデザインがひときわ目を引きます。

これにはデザイン上の意味のほか、より重要な、実用上の目的もあります。一年を通じて降り注ぐ、熱帯の強い日差しを避ける「ひさし」としての役割です。シンガポールの建築家、タイン・スーン氏は、著書で熱帯におけるデザインで最も重要なことの一つは、平面ボリューム感・重厚さ・空間性を持つ建築を作ることではなく、ラインやツジ、網目や陰を有効に利用することにある」と述べています。マレーシアでもそれが実践されているといえるでしょう。

マレーシア建築家協会の会長を務めるケネス・ヤン氏は、これをさらに進め「グリーン・アンローチ」と呼ばれる方法を提唱しています。これは風や雨、地形などの外部要因を積極的に利用し、時には建築デザインの一部として取り入れていくようにする

方法論です。例えば、ヤン氏の代表作の一つは、まるでビルの真ん中を縦に衝立で仕切ったような巨大な二枚の壁を持つています。「ウイング・ウォール」と名付けられたこの壁は、海からの風を受け止め、ビル内部を通過させることにより換気を促し、室温を下げる役目を果たします。こうして冷房の使用を抑え、エネルギーの節約をはかっているのです。

八〇―九〇年代前半の高度成長による建築ブームが、現在のユークなビル群を生み出しました。でも、よく考えてみると、ラインやツジ、網目や陰を有効に利用するデザインは、マレーシアに伝統的に存在していたのです。

マレーの伝統的な住宅を訪れると、内部が涼しいことに驚かされます。地面からの熱気を避けるための高床式、風通しのよい造り、軒下に作られた通風口。これらが相まって、室内を快適に保つのです。冷房はもちろんな、扇風機さえないので、全く汗をかくことはありません。昼寝をするのに、こころより気持ちいいところはないかと思いつかないほどです。

伝統的住宅の美点は、植民地時代の建築にも影響を与えました。軒先を深く張り出し、そこにできた日陰を団らんや昼寝の場所として利用する、ヘリマンダ・コロラル様式の西洋館は、西ア



マレーの伝統住宅の内部。風が渡り、驚くほど涼しい。この建築は今世紀前半のもので、トレンガヌ州立博物館が保存を検討している

ジアや東南アジアの伝統住宅に見られる避暑のための工夫を取り入れたものといわれます。東大の藤森照信教授によれば、日本でヘリマンダツキの西洋館が多く建築されたのは、アジア地域のコロラル様式が持ち込まれた結果だそうです。この地域の西洋館は、日本の西洋館の原型でもあるのです。

現在、マレーシアでは都市部に残った植民地時代の建築の破壊が進んでいます。「東洋の真珠」としてシンガポールと並ぶ繁栄を誇ったペナン島でも同じような状況が見られます。そのことに危機感を持ったペナン遺産トラストは、ペナンをユネスコの文化遺産に登録することを目標に保存活動を始めています。アジアセンターはこのプロジェクトに助成を行なっています。

新しい建築を作ること否定するわけではありません。ただ、長い年月を経てきた建物は、マレーシアの歴史の証人でもあります。そこを訪れることによって、我々はその建物が経てきた時代を思うのです。古いものをすべて壊してしまうのではなく、それをうまく取り入れ、新しいものと共存させていく都市計画。マレーシアにまだに残る濃密な、温かい人間関係、それを将来にわたって残していくための鍵は、意外にそのあたりにあるように感じます。

Information

インフォメーション

国際交流基金アジアセンター主催 二〇〇一韓国映画 プロジェクト

新旧の韓国映画十八本を二巻上映します。

会期：01年12月6日(木)～16日(日)

会場：赤坂・国際交流基金フォーラム
内容：未公開作『レミア』上映、新羅の月夜』『猟奇的な彼女』／金綺泳キムギヨン監督の幻の遺作、死んでもいい経験』／天折の天才監督・李晩熙(イ・マニ)の傑作『帰路』ほか／朴光洙(パク・ファンス) & 朴鐘元(パク・ジョンウォン)監督特集／韓国ドキュメンタリー傑作選、空色の故郷』ほか

料金：前売り一回券八〇〇円、五回券三、五〇〇円当日一回券一〇〇〇円、五回券四、〇〇〇円、前売り券はチケットぴあTEL:03-5533-7999にて発売
問い合わせ：韓国映画プロジェクト事務局(ぴあ映画事業部内)
TEL:03-5533-6511(四二五)

アジア共同キュレーション企画 「アンダー・コンストラクション・プロジェクト」 アジア・ネットワーク

アジア七カ国の若手キュレーター八人が、共同で一つの展覧会を作り上げる「アンダー・コンストラクション」。そのアジア各国での展覧会は、まず十月から十二月にかけて日本の芦屋(樹海より展)と韓国のソウル(マнтажシア展)で実施されました。今後二〇〇二年二月から三月にかけては、以下の通り、インドネシア、インド、フィリピン、タイ、中国において五つの個性豊かな各国展が実施されます。どうぞご期待ください。

- 1) インドネシア(バンドン)
「ドリームプロジェクト」
会場：ラブリク・ギャラリー(バンドン)
会期：02年2月1日(金)～3月1日(金)
(2) インドムンバイ
「グリッキング・イントゥ・プレイス」
会場：サクシ・ギャラリー
会期：02年2月2日(土)～3月2日(土)
(3) フィリピン(マニラ)
「クラフティング・エゴノミーズ」
会場：フィリピン文化センター・ギャラリー(CCC)
会期：02年2月5日(火)～3月17日(日)
(4) タイ(バンコク)



上・右中：「アンダー・コンストラクション・プロジェクト」より
左中・下：「2001韓国映画プロジェクト」より『空色の故郷』『帰路』

編集後記
国家、宗教、民族、人種、性別、職業……。自分を構成している要素は実にさまざまです。日ごろ私たちは、無意識にその垣根を乗り越えることにより、多くの人と心を通わせています。逆に、一つのアイデンティティに固執することとは、たくさんある意志疎通の扉を閉じてしまうことなのかもしれません。巻頭対談に出たいただいた沢氏の曲は、私にだれでしようかを聴きながら、今世界で起っていることについて考えました。(八)

「ご迷惑をおかけします」

会場：バンコク大学ギャラリー、プロジェクト304、サイアムアートスペース
会期：02年2月23日(土)～3月31日(日)
(5) 中国(北京)「生活の幻想」
会場：遠洋芸術センター
会期：02年3月2日(土)～30日(土)
問い合わせ：国際交流基金アジアセンター 国内事業課
TEL:03-5556-2389-1

第四回アジアの明日を 創る知的対話

ヒュンマン・セキユリテ(人間の安全保障)の観点から二世紀のアジアの平和と経済発展を考える対話事業を実施します。本年度は、アジアの貧困層や社会的弱者を対象とした保健・医療サービスに関する研究成果を基に、ヒュンマン・セキユリテの概念を実質的な政策ツールとして活用していく可能性について討議する会議を開催します。

会期(予定)：02年2月/会場未定
共催：財団法人国際交流センター、シンガポール東南アジア研究所
問い合わせ：国際交流基金アジアセンター 知的交流課
TEL:03-5556-2389-1

メリア・フォーラム2001 東南アジアの政治的不安定

東南アジア各国と日本から、政治問題や対外関係を専門とするジャーナリスト、行政官、政策立案に関わる知識人を集め、東南アジア地域の政治情勢の不安定要因とその解消をめくつて自由に討論するフォーラムを開催します。

会期(会場予定)：02年2月下旬または3月初め/バンコク
共催：チロロンコン大学 戦略・国際問題研究所
問い合わせ：国際交流基金アジアセンター 知的交流課
TEL:03-5556-2389-1

アジア・コミック・カルチャー・フォーラム 「グローバルゼーションとローカルイズムの狭間で」

アジア各国のコミックがポップ・カルチャーの中で大きな位置を占めています。日本の影響を大きく受けたアジアのコミック文化は、多様なポップカルチャーと融合し、国境を越えてグローバルに広がり、さらに各国文化によりローカライズされてオリジナリティを確立しつつあります。この流れをくみ、マレーシア、タイ、韓国の

アート系コミック作家と彼らの作品を生み出す社会的・文化的背景を取り上げ紹介します。

第一日目 セッション1「アジア・コミック・カルチャーの最新事情」
第二日目 セッション2「アジア・コミック・カルチャー 最新線」
セッション3「アジア・マンガ夜話」
パネリスト：マレーシア、タイ、韓国、日本から各一名セッション1、2、夏目房之介(マンガ・コラムニスト)日本人四名セッション3)

コディネーター：村上知彦(評論家)
日時：02年2月16日(土)～17日(日)
会場：国際交流基金フォーラム(東京都港区赤坂二十七-22 赤坂ツインタワー一階)
入場料：無料
主催：国際交流基金アジアセンター
問い合わせ：参加申し込み・国際交流基金アジアセンター 国内事業課
TEL:03-5556-2389-1



国際交流基金アジアセンター
The Japan Foundation Asia Center

アジアセンターニュース

第19号 2001年11月発行

発行：国際交流基金アジアセンター

東京都港区赤坂2-17-22 赤坂ツインタワー1F

電話 03-5562-3891 FAX 03-5562-3897-8

編集協力(財)国際文化交流推進協会(エース・ジャパン)

レイアウト：白谷敏夫・武藤まりも(ノマド)

印刷(株)サンニチ印刷

©国際交流基金

Asia Center News

The Japan Foundation Asia Center

Akasaka Twin Tower 1F, 2-17-22 Akasaka,

Minato-ku, Tokyo 107-0052, Japan

TEL: 03-5562-3891 FAX: 03-5562-3897-8

© The Japan Foundation

本誌記事の無断転用を禁じます。

本誌は古紙再生紙とベジタブルインキを使用しております。